

inkopress.com
www.inkopress.com

続地球温暖化の果てに 第三部

震え火を噴く列島

生野以久男

プロローグ

グリーンランド氷床大滑落事件は全世界に一〇メートルもの海面上昇をもたらして一段落した。

突然生じた一〇メートルもの海面上昇は誰も予想しない出来事だった。日本はもとより、世界中でも、なら備えはなかった。全く不意打ちの海面上昇だった。被害は全世界におよんだ。各国とも海面上昇によって領土を失った国々に対して援助するまえに、自国の被害に対する応急対策が先だった。

海に面しているのいかかわらず、すべての国々にさまざまな影響が広範囲にわたり生じた。国際社会にも全く思いがけない直接間接の影響が広がり、いつまでもつづいた。

海面上昇が一段落したところに、大地震が発生し、九鬼陽一郎の故郷を襲った。宮城県沖地震で大津波が発生し、仙台湾を襲う。グリーンランド氷床滑落によって一〇メートルも海面が急上昇しているところに生じた大津波はかつての小高い崖や台地を乗り越え、宮城県北部に広がる大崎平野の奥の奥まで押し寄せた。地震で傷んだ街並みに津波が追い打ちをかけた。街はすっかり姿を消した。

九鬼は急ぎ帰国するが、一人息子アキラの姿はなかった。

海面上昇によってすっかりやせ細った日本列島は身軽になったのか、身体を震わすように、絶え間なく激しく揺れ出した。

第一章

1

「アキラを探しに行ってくる」

九鬼は身支度を整えると、リュックを右肩にかけたままリビングに入り、テーブルに朝刊を広げてコーヒーをすすっている佐藤に近づく。

彼はしばらく日本に滞在することにして、佐藤のマンションに寄宿していた。夜、ベッドに入ってもよちよち歩きのアキラが目に見え、なかなか寝つかれなかった。ベッドで輾転としながら、明け方になって漸く寝入ったのだった。朝、目を覚ましたとき、彼の頭には、アキラを探しに行くことしかなかった。

「どこへ……」

佐藤は目の前に突っ立っている彼を見上げる。

「うむ……」

彼には当てがなかった。だがじっとしておれないのだ。

「ここでしばらく連絡を待っているほうがいいと思うけど……」

佐藤はリュックサックに両腕を通し、いまにも出掛けようとしている彼を引き止めるように言う。

九鬼陽一郎は一人息子のアキラを弟夫婦のもとで一緒に暮らしている母親に預け、米国にある世界有数の大気圏に関する研究機関ACARで研究中だった。子のない弟夫婦がアキラを養子にして、代々つづく医者の家系を継がせたがっているのをいいことに、数年前、彼はよちよち歩きのアキ

ラをひとり日本に残しても単身渡米したのだ。

弟が医院を構えている故郷の街が大地震に襲われたことを知って、彼は胸騒ぎを覚え、急遽帰国したのだ。数年ぶりだった。アキラは小学校に入学しているはずだ。

彼は大地震に見舞われた故郷をM新聞記者佐藤らと訪ねたものの、街は津波に襲われ跡形もなく、一人息子アキは行方不明だった。母親や弟夫婦の消息も一切分からず、一端、引き揚げてきたばかりだった。

「もう一度探してみる」

彼は同じことを繰り返す。

「どこを……」

「……」

彼は応えることができず、佐藤の目をじっと見る。

しばらくして、佐藤の目から引き止めようとする光が次第に薄らいでいった。

「一緒に出かけますか」

佐藤がコーヒー碗を傾け、底に残っているコーヒーを一気に飲み干すと、幾分丸くなった小柄な身体を揺すりながら立ち上がった。

「え？ そうしてくれると嬉しいが……、でも、いいのかな……」

「津波に襲われることがないような平野の奥までなぜ津波が押し寄せたのか、そのメカニズムについての取材があるんだ。地元のT大学に津波の専門家がいる。海面急上昇後はじめての津波なので、海面上昇による増幅効果がないか、これについて記事を書く予定があるんだ。アポイントを取ったら、直ぐ出かけるから……」

佐藤は携帯電話を取りだすと、耳に当てた。

佐藤にはもう一つの思惑があった。九鬼をこのまま日本に留めておきたいと思っていたのだ。

被災調査の帰りの車のなかで、九鬼が「地球の声なき声を聞いた」と言っていたことが彼には気になっていた。一度、このことについてゆっくり聞きたいと思っていた。それなのに、九鬼はアキラを探しに出かけるという。だが出かけるとなると、九鬼がいつ戻るか分からなかった。彼は急いで取材の用事をつくり、九鬼と連れ立って出かけることにしたのだった。

それとは別に、彼には大それた計画があった。大袈裟に言えば、それは日本の未来というより、世界の未来にかかわるものであった。

彼はこれまで日本列島を襲ったさまざまな気候異変や出来事を世界へ向けて発信していた。日本列島は、地球温暖化の果てに大攪乱に陥り荒れ狂う地球システムに翻弄され、壊滅的な被害を被り、破局を迎えようとしているのだ。これは日本列島にだけにかぎらない。海面急上昇で大打撃を受けた世界も、大気システム、海洋システム、地殻システムにおけるさらなる大異変の頻発に見舞われることになるのだ。このことを世界中へ発信して、世界もこのような事態に陥るのだということを警告しておきたかったのだ。

さらに、破局寸前の日本にあって、新しい日本列島の未来を考えていた。彼は存続が危ぶまれ出した人間社会の行く末を探り、地球における人類存続のための新しい地球文明の枠組みをつくりだし、全世界へ向けて発信したいと思っているのだ。彼は焦熱地獄に見舞われ、狂風吹き荒ぶなか、首都圏を奪われ、海面急上昇で海岸をそぎ落とされ、やせ細った日本列島の姿が、全世界にまもなく訪れる未来の姿だと感じ取っていたからだ。

いや未来ではなく、すでに現実の一部となっているのだ。それにもかかわらず、日本ばかりか、世界の反応は鈍く、動きも鈍い。

日本を、世界を動かすには、このことを全世界の人びとに納得させるための明確な未来図がなければならぬ。世界の未来図を描くには、地球の未来図がなければならぬ。地球の未来図を描くためには、地球システムの未来予測が不可欠なのだ。これができるのは九鬼陽一郎以外にいない。彼はそう思っているのだ。

九鬼が「地球の声」を聞いたと言った。この意味を知ったとき、彼はあらゆる手段を講じて九鬼陽一郎を日本に留めておこうと決心したのだ。

「斉木か、これからまた東北の方へ取材に行く。なにか情報がないか」
彼は携帯電話を左手で耳につけ、右手で新聞を畳む。

「九鬼先生も一緒か……」
斉木は三人と一緒に宮城県沖地震の被災地調査に行ったときのことを思い出しているらしい。盛んに、九鬼の様子を尋ねる。九鬼の話をもう一度聞きたいともいう。

「ところで、あの付近に例の白頭式農園はないかな」
白頭式農園は佐藤と斉木の大学時代の恩師「白頭大人」が考え出した自給自足をモットーとする農園のことだった。

「いくつかあるが、どうしてだ」

「それなら、地震や津波の被災者が食料や行場を求めて農園へ入り込もうとするかもしれないな。大崎平野から近いところに農園があればそれも覗いてきたい。電話を入れておいてくれないかな」

「オレも行こうかな」

「おいおい、そんなに席を空けていいのか」

「うん、まあな……」
突然、建物が揺れた。

「それじゃ……、あ……」

「地震か……、揺れていないか」

「震源は……、近いのかな……」

彼は辺りを見回す。受話器の奥から白川に指示する斉木の声が響く。

「どうやら、南海トラフが動き出しているらしい……」

南海トラフは駿河湾から四国沖に連なる。トラフ（舟状海盆）は、海溝のように、海洋プレートが沈み込むところである。南海トラフにはフィリピン海プレートが沈み込んでおり、東海地震、東南海地震、南海地震など、これまで何度もプレート型巨大地震が起きているところだった。

「あそこで大地震が起きたら、大津波が発生する。被災範囲は宮城県沖地震の比じゃないぞ」

「うん、今回は留守番するか。九鬼先生によろしくな。そのうち、『地球の声』を聞かせて欲しいと言っていたと伝えておいてくれ」

斉木は言うだけ言うと、さっさと電話を切ってしまった。

2

「おばあちゃん……、おばあちゃん、どこ……」

返事がない。アキラは来た道を引き返す。どこにも祖母の姿はなかった。

宮城県沖地震が起きたとき、アキラは祖母良子とともに近くの山間にある温泉場にいた。良子の膝の治療のため湯治中だった。テレビで被害を知

り、何度も自宅へ電話したが繋がらず、ふたりは様子を見るため帰る途中だった。

JRは一部不通となり、運休していた。タクシーを呼んだが、なかなか来なかった。昼過ぎになって、タクシーがようやく来たが途中までしか行けない。どうしてもというなら大回りして行けないこともないが、かなり回り道になる。年老いた白髪の運転手は帰りが遅くなるからいやだという。

良子は膝の心配もあったが、行けるところまで行って、その先は歩くつもりで、大きな荷物は旅館に預け、アキラには小さなリュックを背負わせた。彼女は小さな手提げひとつだけにして出掛けたのだった。

山間の国道を小一時間走って、道は二つに分かれたところで、タクシーは止まった。一方には通行止めの際識が出ている。

「この道をまっすぐ行くと駅に出る。でも通れるか分からないな。ほら、さつき横切った川から水が溢れてこの辺一帯も洪水になった。少し回り道になるが、山道を行ったほうが無難かもしれない」

いま走って来た国道に沿って深い谷底を川が流れており、その溪谷は激流に削られた奇岩と紅葉の名所として名高かった。

「じゃ、その山道を行けるところまで行ってもらえないかの……」

「通ったことがない道で、どこまで行けるか……」

運転手は車を回し、来た道を引返した。

タクシーは橋を渡ると、右にハンドルを切り、狭い山道に入っていく。

丘陵を通る曲がりくねった道だ。畑や果樹園が広がるなかに、杉林や雑木林が点在している。向こうに東北自動車道が見えた。

「この辺で……、高速道路を越えてしばらく行くと新幹線の駅だから……」
運転手は車を止め、ドアを開ける。

もう少し先まで行って欲しいが、良子は礼を言ってお金を支払う。二人を降ろすと、タクシーはすぐ向きを変え、去っていった。

3

道端に立つてタクシーを見送る良子を残して、アキラは走りだす。

アキラは小学校に入ったばかりだった。大好きな祖母に付いてきたものの、一週間もすれば家が恋しくなる。パパやママの顔が浮かぶ。本当のパパやママでないことを知らないアキラには甘えたいパパやママだった。

「アキラちゃん、走っちゃダメ」

「おばあちゃん、早く……」

良子はアキラを追いかけるが、尿意をもようして立ち止まる。しばらく辺りを見回してから、道端の藪を掻き分け、林のなかへ入る。もう少し奥へと足を踏み入れた途端、足が滑った。仰向けに倒れた恰好でずるずると崖の斜面を数メートルほど滑り落ち、中段の窪みに倒れ込んでしまった。立ち上がるうとした途端、右の足首に疼痛が走る。良子はそのまま身を横たえた。

遠くで、アキラの声がした。首を上げるが、アキラの姿は見えない。声が近づいてくる。返事するが、大きな声が出ない。次第に、アキラの音が遠のいていく。とうとう聞こえなくなった。

良子は痛みを堪え、道路へ戻ろうともがく。草木に掴まり、左足で崖を掻くが、土砂が崩れ落ちるだけだった。何度やっても片足では斜面を上ることができなかった。

夕闇が迫った。時折、八月の末とは思えない冷たい風が吹く。良子は意識が次第に朦朧としていくのを感じた。

「アキラちゃんは元気ですか……。地震のときには、お家にいなかったらいいと言うじゃないですか……」

佐藤はハンドルを握り、アクセルを踏みながら、口をきつく結んで前方を見つめている助手席の九鬼に声をかける。車は高速道路に入ると、追いつき車線に乗り、スピードを上げていく。

「うん……」

九鬼の返事はそれきりだった。

彼はフロントガラスに目を向けているが、なにも見ていなかった。佐藤の声がしたが、なにも聞いていなかった。アキラのことで頭が一杯だった。

母の腕の中でアキラはそばで覗き込む父親の顔を黒目がちのくりくりした目で不思議そうにじつと見つめたり、笑顔を向けたりする。はいはいしてテレビに近寄り、立ち上がって小さな手を伸ばし、大写しになったアナウンサーの顔や動物に触れ、ぱたぱたと画面を叩く。

彼は思い出そうとしなくとも、小さなアキラのいろいろな仕草と一緒に過ごした日々が脳裏につきからつきと目まぐるしく去来するのだ。

かといって、アキラと一緒に過ごした期間は一年にも満たない短いものだった。それに自ら手を出すこともなく、育児はもっぱら年老いた母に任せきりだった。

数年前、よちよち歩きだったアキラを残して、彼は米国へ発った。子のない弟夫婦がアキラを養子にして医者の家系を継がせたがっているのをいいことに、何年もの間一人息子を預け放しにして、彼はひとり米国の研究機関で研究に没頭していたのだ。

「よちよち歩きだったアキラも、今年、小学校へ入った。」

彼は冷静になって考えると、郷里の罹災を知って米国から飛んで帰り、何年も放置していた息子に対し、俄に父親のように振舞いだした自分からならなかった。父親面して息子の安否にここを震わせている自分に戸惑いすら感じていた。

だが止めどなく思い出されるアキラは小さいときのアキラだけだった。

アキラはもう小学校一年生だ。だが彼の脳裏に浮かぶアキラはよちよち歩きの幼い顔をした小学校一年生だった。彼は自分に言い聞かせる。いまさら悔いても嘆いても過ぎた時間を取り戻すことはできないのだ。

彼のこころのなかは複雑だった。アキラを放置していた時間に仕返しされていくような気がした。アキラと会わずにいた数年の時間によって、いつのまにか自分とアキラの間に見えない距離ができてしまっているのだ。

「アキラだと分かるかな。全然分からないかもしれない……」

彼は独り言のように呟く。

「A C A Rに戻るのですか」

佐藤は彼にちらつと視線を走らせた。

「……………」

「アキラちゃんが無事と分かれば、A C A Rへ戻ることになるのですか」

佐藤は彼の心配をよそに再度繰り返す。

「……………」

彼は口を閉ざしたまま、じつとフロントガラスに目を据えている。

「『地球の声なき声』を聞いたと言っておられましたね……」

佐藤は前方に顔を向けたままハンドルを握りしめている。

「『地球の声』？……………」

「このまえ被災地を訪ねた帰り道の車のなかで……」

「あのときか……」

彼は思い出したように、大きく頷く。

それは郷里の街が大地震に襲われたのを知って、急遽帰国した日、佐藤に連れられて被災地を訪れたときのことだった。地震後襲った津波に流されたのか、実家の古い家は跡形もなかった。かろうじて弟が診療室用に増築したコンクリート建物の一部が残っていた。弟夫婦が年老いた避難民の手助けをやっていたこと、アキラと母良子が湯治に出掛けていたらしいことを耳にして、その日は一端帰途についたのだった。

「地球にはモンスターとなった人間どもを徹底的に排除するというシナリオがあるというものでしたね、それは……」

「うん……」

「その地球の今後のシナリオを書いてくれませんか。国内だけではなく、全世界に向けて発信したいのです。この先、地球で生起する大異変のなかで人間はなにを仕出かすかわかりません。食糧や水が不足すればどうなりますか。不足するエネルギーや資源の奪い合いがはじまれば、貯め込んである大量殺戮兵器を持ち出して殺し合いをはじめにちがいない。この地球のなかで、人類を存続させるために、いま人間がどう対処すべきなのか。いまずぐこのための行動を起こさなければ、われわれは破局を迎え、人類が絶滅するのは目に見えているじゃないですか。アキラちゃんたち次の世代のためにもすぐ行動を起こすべきです……」

佐藤は前方を見つめたまま、熱っぽくつぶつける。

彼は黙って聞いていた。彼自身気候変動の予測研究をはじめたときから、予測された事態に対する最善の対応を期待して研究を進めてきた。だがい

つも失望させられてきた。何度こんな異変が発生すると告げても、誰も聞く耳を持たず、真剣に取り組むことがないのだ。いつときその気になってもすぐ忘れてしまう。この国の人びとには現在だけで、未来がないのかと思えて仕方がなかった。この国の人びとにかぎったことではない。米国でも同じような体験は繰り返しあじわった。

彼には現代文明社会ではいまの一瞬が一番大事で、未来をどうしようという考えがいつのまにか希薄になっていったように思えるのだ。現代文明が爛熟期にあるからなのか。それとも現世本位の現代文明に溺れてしまっているからなのか。

文明が人間の欲望に基づく営みであるかぎり、現世本位とならざるをえないのはごく当然なことであるとしても、かといって世代を超えた未来への展望もなく、目先の利益にとらわれ、あげくの果てに墓穴を掘って自ら自分の首を絞めているのはどうということか。

現代文明の進展とともに、人間を殺す武器の巨大化高度化大量化を押し進めてきた。そして原爆や水爆といった全人類を道ずれにする究極の大量殺戮兵器を開発し、実際に実戦配備していつでも即座に全人類の頭上に核弾頭を雨と降らし、放射性降下物をばらまく用意ができあがっている。ということとは、現世の人間によって、人類の命運が握られてしまっているということなのだ。

巨大化高度化大量化は大量殺戮兵器ばかりでない。現代文明はあらゆる分野で現世本位の巨大化高度化大量化が進んでいる。

人間活動にともなう二酸化炭素などの温室効果ガスの大量排出は、地球システムの攪乱まで呼び起こしてしまった。地球温暖化の果てに、いまや、日本列島は壊滅の瀬戸際にある。いや、日本列島だけではない。世界

全体が壊滅的な被害を被り、人間社会の崩壊を迎えようとしているのだ。

にもかかわらず、世界は目先のことに囚われ、あまりにも長い間無関心で過してきた。二酸化炭素の排出削減は口先だけで、実効がともなわず、毎年、排出量が増え続けた。漸く減りだすときにはすでに手遅れになっているのだ。

彼にはなにかも手遅れのように感じてならなかった。アキラが行方不明で消息すら掴めずにいることが、彼の気持ちをますます暗くしていたのだ。

「いまさら、なにをやっても間に合わないかも……」

彼は低い声で呟く。

佐藤は一瞬ハンドルを強く握る。車体が軋み、激しく揺れた。

「あつ……」

彼は叫ぶ。声にならなかった。

佐藤はハンドルを握り直し、大きく息を吐いた。

「ところで、地球のシナリオは……」

しばらくして、佐藤は彼を一瞥して、口を開く。

「地球は地球温暖化の果てに、すべてをなし終えてからゆっくり寒冷化を目指す。その過程は……、人間社会には全くお構いなしに進む……」

彼は前方に目を据えたまま、二度と口を開こうとしなかった。

4

「坊や、どうしたの」

アキラのそばに車が止まった。車の窓から中年の女が顔を出した。

「おばあちゃんが……」

アキラが祖母とはぐれたことを知った中年女は車から降り、しばらく辺りを探した。祖母の姿はない。夕暮れが迫る。女は携帯電話で警察へ連絡する。

通報を受けた警察が付近を搜索するが、その日は見付からなかった、翌朝になって、付近のひとも加わり、大がかりな搜索がはじまったのだった。

搜索隊は二手に分かれ、アキラが歩いた道路の両側を搜索することになった。道路はなだらかな丘陵の中腹を切って東西に走っており、一方は崖で、もう一方は雑木林が広がるなだらかな斜面が上へ延びていた。崖の下には溪流の流れる険しい沢があった。

アキラも搜索隊の後を追って、雑木林のなかへ入る。最初は太った中年の警官について林のなかを探し回っていたが、二時間もすると大人たちは搜索を中断し、休憩に入り、情報交換や雑談をはじめた。アキラはひとりで林の奥へと入っていく。

林が途絶え、畑に出た。アキラはさらに先へ進んで行く。

遠くで声が出た。発見したらしい。

だがアキラは聞こえないのか、さらに先へ行く。

崖の方を搜索していた一団が動きだす。林のなかで休憩していた人びとが声のするほうへ移動しはじめた。

「見付かったのか」

「あ、あそこだ……」

崖を搜索していた消防団の若い男が声をあげた。

「崖の中段の窪みになにか見えませんか……」

「やはりそうです……、あそこにひとりが倒れています」

一人が崖を下りていく。もう一人がつづいた。

「ロープと担架を……」

「救急車を……」

さらに、一人が崖を下りていった。

「大丈夫ですか」

一人が声をかける。返事がない。

「おばあちゃん、おばあちゃん……」

もう一人の若い男が耳元で大きな声で呼びかける。

老女はうつすらと薄目を開けた。

「大丈夫だ。担架、担架をそこに……」

年高の団員が若い団員に窪みを指差す。老女が倒れている窪みは崖の中段にできた狭い棚状の台地にあった。

老女を持ち上げ、横に広げた担架に載せる。持ち上げたとき、老女は顔を響め、短い悲鳴を上げた。

「怪我している。足の骨が折れているかもしれない」

身体を担架に固定する。

「ロープを……、ゆっくり引き揚げるんだ……」

救急車の警笛音が近づいてくる。

5

「さきに大学に寄っていいですか。途中ですから……」

佐藤は前方を見たまま、助手席の九鬼に告げると、スピードを落とし、出口よりの車線へ車を移動する。早めに高速道路から下りることになって、一区間も行けば通行止めだった。

彼は返事しない九鬼を一瞥し、ハンドルを大きく切って出口へ向う。

高速を下りると、道路が急に混みだした。信号で止まっている車列に隙間を見付け無理やり入り込む。

T大学は公園のある高台にあった。研究棟の建物の近くで、車を停めると、彼は携帯電話を取り出した。

「M新聞の佐藤ですが……」と言いながら、彼は車のそとへ出る。

九鬼は黙ったまま、目で彼を追う。

二言三言やり取りして、彼は車に戻る。ドアハンドルに手をかけ、九鬼にどう切りだそうか迷い、しばらく佇む。

彼は九鬼にも取材に同席してもらいたいと思っていたのだ。九鬼の返事も待たず、高速を下りたのも、そのせいだった。目的地へ先に行けば、九鬼はそこに残ると言い出し、取材に同行してくれないおそれがあつたからだ。といつても、九鬼の頭はアキラのことで一杯で、彼に付合おうという気にならないかもしれなかった。

そのとき、彼は出掛けしな感じた地震の揺れを思い出した。

「南海トラフ付近で地震があつたらしい……」と言いながらドアを開け、彼は九鬼を窺う。一瞬、目が光る。彼はすぐつつける。

「……ところで、取材で研究室へ行きますが、先生はどうしますか、ご一緒しませんか。なにか被災地に関する新しい情報があるかもしれませんよ」九鬼が身体を動かすのを見て、彼は車のドアを閉めた。

「どうぞ……」

研究室は三階にあつた。半開きのドアをノックスすると、なかから低い声がした。

背の高い痩せた細いメガネの中年男が奥の机から立ち上がると、近づいて来て、ドアが大きく開いた。

ドアのかげの隠れるように、入口のそばに応接セットがあつた。その向こうの大きな窓から市街が一望に眺め下ろすことができるが、研究室のなかには書類が方々に積まれ、どことなく雑然とした雰囲気支配していた。

「M新聞の……」

佐藤は名刺を差し出す。

「佐藤さんですね。向井です」

中年男はメガネを外して名刺を受け取ると、九鬼へ目を向ける。

「こちらは九鬼先生です」

佐藤は急いで紹介する。九鬼は頭を下げた。

「九鬼さんですか。珍しい名字ですね。同級にも九鬼信二郎という男がいました……」

向井は椅子をすすめる。

「弟です」

腰を下ろしながら短く応え、彼は向井という男の顔を見た。陽に焼けて浅黒いが、見覚えある顔だ。

「そうでしたか。すると、気候変動の研究を……。信二郎くんとはずっと一緒でしたよ。彼が医学部へいくまでは……。ところで連絡がつかしましたか……」

「まだです。これから探しに行くところなんです、さきに先生にお会い

してからと思ひまして……」

九鬼が口を噤んでいる一瞬を捉え、佐藤が横から口を挟む。

向井が佐藤の方へ顔を向けた。佐藤はすぐさまノートを開き、取材の態勢に入る。

「電話でも申しましたが、津波と海面急上昇との関係についてお話を伺いたいです。今回の津波は海面急上昇によって増幅されたのですか」

「……………」

向井は黙って、佐藤と九鬼を交互に見ている。

「どうして大崎平野の奥まで津波が押し寄せて街を襲ったのですか」

「被災地へは……………」

九鬼を見ながら、向井が口を開く。

「昨日、見えました」

「実は、いま調べているところなのではっきりしたことはまだ言えないのですが、多分、河川の水路を伝って津波が押し寄せていったのじゃないかと……………」

「この辺の海面は……………」

「一〇メートルほど上昇しておりまして、あのときはそれに満潮時と重なって、以前の海岸からかなり奥まで海水が入り込んでいたのです。ですから、津波はかなり大きくなって陸地を襲ったはずですので、河川伝いに限らず、低地を回り、低い丘陵を乗り越えて大崎平野へ流れ込んでいったのかもしれない。家屋にかなりの被害が見られるので、一時に相当量の水量が押し寄せたと推測されます。単純に考えて、海面急上昇分を加算すれば津波の高さが二〇メートルを越えていても不思議ではないですから……………」

向井は立ち上がると、海面急上昇以前の付近の海面の写真を持ってきた。

海は窓から見渡せる市街のずっと先だ。海面急上昇で海が間近に迫っていた。

以前の海拔一〇メートル地点がいまではゼロメートルなのだ。そこに一〇メートルの津波が押し寄せれば、以前の海拔二〇メートル地点まで津波が達することになるわけだ。それに満潮時や大潮が重なればさらに高まる。かつての丘陵のなかの盆地の平野にも、海面急上昇後は津波が押し寄せるだろう。大きな河川や丘陵間の平地は恰好の導水路となって、津波を奥地へ導いていくというのだ。

「今回のケースは……………」

「ここに大きな河川があるし、正面の丘陵を迂回するように平地が広がっている。それに丘陵を切って国道が走っている。これも河川と同じように津波の導水路となったのでしょう。こういう条件が揃えば、内陸部の平野まで津波が押し寄せる場合があると言えましょうね」

「海面急上昇による津波増幅効果といったことは考えられるのですか」

「それはよく検討してみないとなんとも言えません。もし増幅効果があるとしても、メカニズムがどうなのか、いまのところ、なんとも言えません。ただ、これまでの研究報告のなかに、海面上昇と高潮の関係を調べたものがあります……………」

向井によると、海面が上昇すれば高潮発生頻度が増えるという。潮位の変化が大きいところと小さいところと比較すると、変化の小さいところのほうが酷く、海面が数十センチ上昇しただけで一〇年に一度の発生頻度の高潮が毎日のように発生するようになるらしい。

「今回の津波ではかなりの被害があったようですが、通常よりも……………」

「津波のエネルギーが思ったよりも大きく、移動した海水の量も大きかったということでしょうか。それだけに犠牲者も多く、この病院にも……」

向井は突然しんみりした口調になった。ソファの端で口をきつく結んで聞いている九鬼の暗い顔に気付いたらしい。

「この病院にもですか……」

九鬼が低い声で呟く。

佐藤は九鬼を一瞥すると、「西の方で地震があったようですが……」と言いながら、ノートをたたみ、ボールペンを胸のポケットに差すと、礼を言い、立ち上がった。

引きずられるように九鬼も腰を浮かし、ソファから立ち上がる。

「一寸、揺れたようですが、大きな津波の発生はないんじゃないでしょうか。ただこれが大地震の前触れかどうかは分かりませんが……」

「そうですか。大地震の前触れでなければいいのですが……」

向井は「今回の現地調査報告書を近々纏めますので、できたらお送りしましょう」と言いながら、二人をドアまで送ってきた。

6

「もし、もし……」

研究棟の外へ出ると、佐藤は携帯電話を取りだし、耳に当てる。

九鬼は離れて、一人駐車してある車を探す。彼は一刻も早く現地に行きたかった。避難所となっていた市役所を訪ね、アキラの安否を尋ねたかった。

佐藤が息を弾ませ、走って来た。「連絡があったらしい」と言いながら、鍵を開け、九鬼を促し、車に乗り込む。

車はすぐ動き出した。

佐藤が本社に電話したところ、市役所の担当者から連絡があったという。そこで担当者に電話したが、昼休みらしく掴まらないのだ。

「とにかく、市役所へ直行してみましよう。アキラくんが見付かったのかもしれない。高速で行けるところまで行くことにしますか。高速に乗ったほうが早いだろう」

佐藤は前方に目をやったままだ。彼は黙ったまま、ちらつと佐藤の顔を覗く。

車は一般道路を駆け抜けて、高速道路に入る。通行止めになっていた区間が徐行区間に変わっていた。

インターから一般道路に下りて、車は市内に入っていく。

道路や周辺ではすっかり水が引いていたが、通る車の数は少なく、閑散として人影もなかった。壊れた家屋の残骸が放置されたままだ。道路の両端にも泥まみれの家具や家電製品が積まれていた。

市役所が見えてきた。土盛りされているのか、周囲より幾分高台にあった。駐車場の車の数は大分減っているようであったが、エントランスホールや廊下にはまだ避難者の姿があった。

入口に近い奥まった一角にひとが群がっている。近くの壁には尋ね人のカードが一面にピンで留めてある。写真もあった。そのまゝに細長い机を出し、パソコンをまゝに三人の係員が応対している。行方不明者の臨時案内窓口だった。

「連絡を頂いた九鬼ですが……」

佐藤が人込みを掻き分け机に近づき、尋ねる。

「くきさん……、九鬼陽一郎さんですね」

かなり若く見えるが、落着いた対応の態度から四〇才を超しているらしい小柄な女性職員が顔を上げた。

「はい」

「九鬼良子さんらしい方がF病院に收容されていますが……」

女性職員がパソコンの画面を見ながら、応える。

「良子一人だけですか。もうひとり、子供が一緒じゃなかったですか」
横から九鬼が口を出す。

「はい、お一人のようです。でも本人かどうか……、まだ確認できないので、もしかした別人かもしれませんか……」

「怪我しているのですか……」

「そうかもしれません。治療を受けているようですから。でも、ここでは詳しいことは分かりません……」

「F病院は……」

F病院は隣の病院だった。女性職員からF病院の地図を受け取ると、二人は急いで車に戻った。

道を間違えたのか、F病院はなかなか見付からなかった。

佐藤は車を止め、携帯でF病院の住所を確かめる。

「住所が違っていたのか」

佐藤は沈んだ顔付きの九鬼を一瞥すると、独り言をいいながら、ハンドルを切ってバックする。車は向きを変えると、走り出す。

彼はじっと車窓に目を据えたままだ。彼にはアキラが母と一緒にないことが気になって仕方がなかった。アキラは母良子と湯治に出掛けたのでは

なかったのか。それとも二人が地震か津波に遭い、母だけが助かったのだろうか。

「あれか、F病院は……」

丘の上に白い大きな建物が見える。車はスピードを上げて坂道を上っていった。

7

「あの……、九鬼さんに……面会したいのですが……、病室は……」

佐藤は息を弾ませ、額に噴き出た汗を手で拭き拭き、とぎれとぎれに言う。

「九鬼さんですか。その面会票に……」

縁無しメガネを掛けた中年女の受付係が小柄な男の顔をジロジロ見た。

佐藤は車を駐車させると、小柄な身体を前傾させ突進するような恰好でエントランスへの階段を駆け上り、受付のカウンターに一直線に走り寄ったのだった。

「九鬼良子です。昨日收容させられたそうで……」

後を追ってきた九鬼が面会票に記入して差し出す。

「その患者さんでしたら、三階の病室です。そのエレベーターで三階へいらして、ナースステーションで尋ねてください」

九鬼は礼を言う間に、佐藤はエレベーターへ急ぐ。三階のボタンに手をかけ、九鬼が乗り込むのを待つ。

エレベーターが三階で停止して扉が開くと、ナースステーションのカウ

ンターが目飛び込んできた。

「九鬼良子に面会したいのですが……」

カウンターの向こうにいる若い女性看護師に面会札を見せ、九鬼が尋ねる。

「九鬼さんのお家の方ですか」

若い女性看護師は顔を上げ、彼を一瞥すると、「一寸、お待ち下さい。先生を呼んできますから」と言いながら、あたふたと奥へ駆け込んでいった。

カーテンが勢いよく開け、白衣の細身のすらつとした医師らしい男が顔を出した。だが医者らしからぬ浅黒い顔に、見る間に失望の色が走った。

「あ、九鬼さん……、九鬼くんのお兄さんですか……」

男は原田と名乗り、弟信二郎と大学で同級だったと言い、ロビーに誘う。「そうでしたか……」

彼は原田のがっかりした沈んだ顔を見ながら、信二郎も未だに行方不明のままなのかと思った。

「九鬼さん、患者さんがお母さま本人かどうかはまだ確認できていないのです。もしかしたら、別人かもしれません……」

「はあ？」

「実は、記憶を失っているようなのです」

「そうですか。で、母一人ですか。一緒に子供はいませんでしたか」

「お一人です。とにかく、会ってみて確かめていただけませんか」

原田は「救急車で昨日搬入されてきたばかりで……、なんでも崖から転落して足を骨折して動けないでいるところを発見されたそうです」と言い、先に立って自ら病室へと案内する。

「眠っておられるようですね」

廊下から病室に足を踏み入れた原田は足を止める。

「母です。間違いありません」

彼はベッドに近づき、患者を覗き込む。

原田は大きく頷くと、そのまま身を翻す。二人に付いて来た佐藤が原田を追って出ていく。

彼は枕元に寄って母の寝顔を覗く。寝息が聞こえる。しばらく会っていないうちに、頭髮は真っ白になり、ふくよかな顔にも皺が増えていた。彼は丸椅子をベッドのそばに引き寄せ、腰を下ろした。

彼はアキラを思い浮かべた。母と一緒にいなかったのか。避難所となっている市役所を訪れた最初の日に声を掛けてきた近所の老人が「お孫さんと湯治に出掛けているようだ」と言っていたが、あれはデタラメだったのだろうか。それともアキラも崖の下へ転げ落ちて行方不明になったのだろうか。

彼は立ち上がった。母良子を病院に運んできてくれた救急隊員に会って、そのときの様子を聞きたいと思った。

「アキラちゃん、遠くへ行っちゃダメ……」

彼は母の声に振り返る。眠ったままだ。

「おばあちゃんはここよ……」

寝言だった。彼はじつと母の寝顔を見た。母はアキラの夢を見ているのだろうか。彼はふたたび丸椅子に腰を下ろす。

彼は目を閉じた。瞼の裏に小さいときのアキラが浮かんだ。アキラも小学生になっているはずだ。一年生の背丈はこのくらいか、背は高いはうだろうか、体重はどうか、太っているのか、彼は目を閉じたまま、想像を膨

らませていく。

彼は視線を感じて、目を開ける。良子がじつと彼を見ていた。

「母さん……」

彼は呼びかける。

「どなた様ですか」

彼を上げしげと見ている良子が口を開いた。

「ボクだよ、母さん。陽一郎だよ」

「……………」

良子は必死に思い出そうとしているらしく、目を見張り、額を擡める。

「母さん、アキラは……………」

「ア・キ・ラ……………」

「アキラだよ」

「アキラかい……………」

「うん……………」

彼は生返事して、母の手を握り、じつと母の目を覗き込む。母の手から生暖かい感触が伝わってきた。彼は母の手を両手で固く握りしめた。

突然、母の目が涙で潤んだ。誘われるように、彼の目にも涙が溢れた。

母は崖から転げ落ちてどんな目に遭ったのだろうか。わが子の顔を忘れるほどの激しいショックを受けたのだろうか。

ふと、彼はアキラも父の顔を忘れてしまい、思い出すことができないのではないかと思った。いや、自分にもすっかり大きくなったアキラの見分けがつかないかもしれない。育ち盛りの五年間も会わずにいた報いか。それにしても養子に欲しいという弟夫妻の申し出をいいことに、長い間アキラを預けばなっしにしてしまっていた自分を忌々しく思えて仕方がなかつ

た。

8

「どうでしたか。お母さまは……………」

開放してあるドアから、原田が近づいてきた。

「まだ、分からないようですが……………」

彼は丸椅子から腰を上げる。

「一時的な急性の記憶喪失としますので、このまま、しばらく様子を見てみましょう。二、三日もすれば回復なさるでしょう。ところで……………」

原田はこう言つて、後ろを振り返った。

不意に、後から小柄の佐藤の身体が現れた。長身の原田に遮られ、彼には佐藤に気付かなかつた。

「アキラくんのことだけ……………」

佐藤はベッドに目をやり、彼を廊下に誘い出す。

「アキラのこと……………」

彼は胸を締めつけられるような不安に襲われた。母と一緒にいるのに、アキラの姿がなかつたのだ。

「行方が分からないというんだ。昨日のご母堂捜索のときは一緒だったそうですが……………」、いまもその辺りを捜索しているらしいが、これから行つてみましようか……………」

佐藤が歩き出した。佐藤は病院に良子を搬入したときの救急車を聞き出し、そのときの担当者に会つて救出時の状況を取材してきたところだった。

「で、どこなの……」

彼はやりきれない思いで、足早に行く佐藤を追う。

弟夫婦がいまもって安否の確認もできず、生きさえ危ぶまれる状況なのに、アキラまでが行方不明とはどうしたことか。それにしても、母と一緒にだと思っていたアキラがなぜ行方不明になったのだろうか。

佐藤は彼が乗り込むのを待つて、すぐ車を発進させる。

車は橋梁を渡り、右にカーブをきって、山道に入っていく。道路端にパトカーや軽トラックなど車が数台駐車している。

「この辺らしい……」

佐藤は呟き、車を端に寄せる。

パトカーに人影があった。佐藤が近寄る。ドアが開いて、太めの中肉中の警官が下りてきた。佐藤が話しかける。人の良さそうな顔が振り返って、九鬼を見た。

山道は丘陵の中腹を切って走る。道路の両側には雑木林が広がり、一方がなだらかな斜面で頂上へと連なる。もう一方は僅かばかりの平地の先が溪流が流れる谷底へ向って急な崖になっていた。

「怪我人は崖の中腹で発見された。足を滑らし、崖へ落ちたらしい」

かなりの年の太った警官は近寄る彼をじろじろ見ながら、言う。

その前の日に崖から落ちたのに、一晚経ってようやく見付かったのだ。年もとっていたし、脱水気味のうえ、足を骨折していた。実は、前日の夕方遅く、山道を泣きながら一人で歩いている小さな子供が見付かり、一緒にいたおばちゃん之急になくなったというので、翌日早朝から捜索を行なって発見したという。ところがその捜索に加わっていた子供が行方不明になっていることが分かり、いま捜索中なのだという。

「その子供というのは……」

彼は佐藤の後ろからまえばに身体を突きだし、警官に顔を近づける。

「九鬼医院の子らしいということだったけどなあ……」

警官はいぶかしげな表情を浮かべ、曖昧な言い方をした。

「その子はアキラ、九鬼アキラと言ってませんでした」

彼はせつづく。

「この方が九鬼さんのお家の方……、というとなんだ……」

警官は佐藤を見る。

「アキラくんの父親ですよ」

「父親？」

「そうです。ところで、いま、どこを捜索しているのですか。その子供は見付かったのですか」

佐藤が大きな声を出した。

大きな声に驚いたのか、警官は斜面の上の方を指差した。車に戻ると、警官は捜索隊と連絡をとり、捜索中の場所と状況を尋ねはじめた。

「現在、上の方を捜索している。まだ見付からない……」

彼はいてもたってもおれず、警官の説明の途中でガードレールを越え、

雑木林のなかへ入ってしまう。

アキラはどこだ。彼はどんどん斜面を登っていく。佐藤があとを追ってきた。

長い棒をもった若い男の姿が遠くに見えた。

「見付かりましたか」

彼は近づいて、声をかける。若い男は頭を振って先に進む。

雑木林を抜け、頂上に出た。牧草が生えている草原が一面に広がって

た。地平に一行に植えられたような杉の林が浮かぶ。

彼は杉林の向こう側になにかが隠されているような気がした。後ろから佐藤が顔の汗を拭き拭き追いかけてくる。

彼は地平をめざして一路草原を横切っていった。

9

「あの道は……」

九鬼は後ろから付いてくる佐藤を振り返る。

草原を抜けると、崖のような急な斜面の雑木林の下に山道が走っていた。

彼には車を降りた山道のような気がしたのだ。

「もう、引き返しなせうよ」

後ろで佐藤の大声がした。

「道がある。さっきの山道と同じ道かもしれない。この道を行けば車を降りたところ出るんじゃないのかなあ……」

彼はアキラもそう考えたにちがいないと思い、急な斜面を下りていく。

道をしばらく行くと、道端に太い丸太を二本立てただけの門があった。

丸太には字が書いてあるが、風雨に曝された木肌の文字は判読し難い。門から砂利道が走り、その先の奥まったところに平屋の細長い建屋の屋根が見える。

ふたりは門からなかへ入り、砂利道を建屋へ近づいていく。

「もしかしたら、白頭大人の農園かもしれない」

佐藤が顔や首筋の汗を拭き拭き、ぼそつと言う。

「……………」

彼にはなんのことか分からない。聞き糺そうと佐藤を振り返るが、なぜか声が出ない。

ふたりはおそろおそろ建物に近づく。

建屋が間近に見えてきた。建物は古く、木造だった。ガラス窓はいっぱいに開放されているが、なかには人影が見あたらない。

エントランスには木製のデッキが張り出して、そのさきに三段の階段が地面へのびている。ふたりは階段を上り、デッキへ上がる。ドアは大きく開かれていた。

薄暗い建物の奥に人影があった。ふたりに気付いたのか、人影が動き、開放されているドアに近づいてきた。

「ようこそ。園長の大野です……」

中年男が日に焼けた顔に笑みを浮かべている。

「ここはもしかしたら……」

彼が行方不明の子供を探していると言おうとしていると、佐藤が横から遮るように口を挟んだ。

「M新聞の佐藤さんですか……」

ふたりを交互に見ながら、大野は「斉木さんから電話がありました」と言い、建物のなかへ招き入れた。

一歩なかへ足を踏み入れると、そこはエントランスホールにしては広すぎる空間が広がっていた。大小のテーブルと椅子が窓際に点々と並んでいる。

「小学校の旧分校舎です」

大野はこう言って、不思議そうな顔付きをして辺りを見回しているふた

りに椅子をすすめた。

「すると……」

「ええ、ここは講堂兼体育館だったところですよ……」

大野は説明をはじめた。

この地区は山間部にいくつかの小さな集落が点在する林業中心の山村だった。戦後の町村合併によって隣接の市に吸収合併されて以来、急速に人口が減少し、典型的な過疎地帯となった。木材の輸入によって地場産業の林業が衰退し、若者の働き口もなくなって、人口減少がさらに加速した。最近、ついに、集落が無人性化してしまい、廃村にいたったという。

「この辺一帯が農園ということ……」

佐藤は感心したような声を出す。

「ここから山奥にかけて旧集落が点在しているのですが、これらを活用させてもらっているわけです。集落跡には手を入れれば住める廃屋がいくつもある。それらを農園の宿舎用に利用させてもらっているんですよ。いや、むかしの村を再生させ、新しい共同体をつくろうとしているといえましようか……」

大野はますます調子に乗って喋りだす。てっきりふたりが農園の取材に来たと思っているらしい。

「あのう……。実は、子供を探しているんです。行方不明になった……」

九鬼がしびれを切らして、大声で大野の話を通る。

「あ……。そうでしたか……」

大野が目丸くして、彼の顔をまじまじと見た。

「こちらにも大地震と津波の被災者が大勢避難して来られたんじゃないんですか」

「二、三あったようですが、ここはかなり奥まったところでした、あまり人の往来がないところですので……」

「昨日、小学一年生ぐらいの男の子がどうやらこの辺に迷い込んだらしいのですが、それで……」

彼は自分たちも迷い込んで来たと言おうとしたが、佐藤が背中を小突くのを感じて、口を噤んでしまう。

「一寸、お待ち下さい。調べてみますから……」

大野は立ち上がると、そそくさと奥へ行った。

彼も腰を上げて大野の後ろ姿を見送ると、ふたたび腰を下ろした。

窓から心地よい風が入ってくる。近くで蝉の鳴き声があった。いつの間にか、汗まみれだった全身から汗が引いていた。

彼は口を閉じたまま、じっと待った。頭にはアキラのことしかなかった。

アキラ、どこにいるのだ。おばあちゃんは見付かったよ。近くにいたら、声を上げて知らせてくれ。

彼はこころのなかで何度も呼びかける。彼は大声で呼びかけたかった。だがなぜかいつも声にならない。

アキラは養父母役の弟夫婦が津波の犠牲になったらいいことを知っているのだろうか。なにも知らずに祖母探しをつづけているのだろうか。

アキラは丸太の門に気付かず、山道をもっと奥へ進んで行ったのではないだろうか。それとも崖のしたの山道に気付かず、さらに奥へと迷い込んだのだろうか。もしかしたら、沢や窪みに落ち込んでいるのだろうか。

アキラはどうしているだろうか。急にいなくなった祖母をいまでも探し回っているのだろうか。

どこにいるんだ、アキラ。おばあちゃんは見付かったのだよ。

彼はこころのなかで叫ぶ。

一段と蟬の鳴声が高まった。夏の終りを感じて鳴声を張り上げているのだろうか。

木々の小枝が揺れた。一瞬、蟬の鳴声がぴたりと止んだ。木々が騒めき、一陣の風が音を立って吹き抜けていった。

「お待ちせしました……」

大野が声を発しながら、小走りに近づいて来る。

彼は思わず、腰を浮かした。

「そのお子さんらしい子供が診療所にいたようですが……」

奥の集落にある農園の診療所に、昨日の午後遅く、道路端に倒れていた

子供が担ぎ込まれたという。

「そうですか。それで……」

「今朝になって、姿が見えないというんですよ」

大野は暗い表情になった。

「先生、行ってみましょう。どの辺ですか、診療所は……」

佐藤は椅子から立ち上がって、叫ぶ。

「送らしましょう」と言う大野の後を追って、ふたりは急いで外へ出た。

10

「脱水症状がありましたね。手当したらまもなく回復しました。夕食もすっかり平らげましたね。それでも疲れていたのでしょう、直ぐ、眠ってしまつて……」

ふたりを診療室に招き入れたると、額のかなり上までが禿げ上がった初老の医師は穏やかな目を向けて言った。

農園の診療所は以前の村の診療所跡にあった。建物は若干手を入れたものの、殆ど以前のままだという。診療所に隣接して広い母屋があつて、医師夫婦が住んでいた。アキラは夕食後、母屋のなかの診療室に一番近い端の部屋で横になって眠り込んだという。

「その子は……」

「部屋はもぬけの殻で、どこへ行ったのか……」

「探さないのでですか。まだ小さな子供なんですよ」

「わたしは戻ってくるんじゃないかと待っているところなんですがね」

医師は九鬼の顔を怪訝そうに見ている。

「その子の名前はなんと言つてましたか」

佐藤が口を挟む。

「疲れ切っていたのです。夕食時以外はずっと眠っていたのですよ。一晩ゆつくり休ませてからにしたらと妻が言うので、そうしたのでしたが、まさか早朝に黙って姿を消すとは思つてもみなかった。まだ子供だったですし……」

医師は溜息交じりに、ことさら声を潜めて言う。

突然、机の電話が鳴った。医師は手を伸ばして、受話器を取る。

「あ、そう。本当にその子供だったですかね……。それで……。そうですか。分かりました」

医師は受話器を戻すと、ふたりに顔を向けた。

「子供たちは街の方へ下つて行ったようです。農園の人が通り掛かりに道端を歩いている二人連れの子供たちを見かけたと知らせてきたのですよ」

「そうですか。で、子供たちと……」

「実は、ここで預かったのはひとりですが、姿が見えなくなつて心配だったので、方々に声をかけておいたのです。その子供たちのなかにお探しの子がいるかどうか……。どんな年格好なのですか……」

医師は九鬼の顔を見、それから佐藤に目を移した。

佐藤は応えられずにいる彼に目をやりながら、一部始終を話す。

「そうでしたか。でもおばあさんが見付かつておられるなら、連れていつて会わせればいいわけですね」

「そうなのですが、実は、ショックで記憶を喪失しているような状態なのです」

「え、それは……」

医師はもう一度彼をじっと見た。彼はその視線に耐えられず、視線から逃れるように思わず椅子から立ち上がった。

「子供たちは小学生と中学生ほどの年格好だったようで、自分の家を見に街へ行ったでしょう。また連絡してみてください。子供たちがここに戻ってくるかもしれませんから……」

医師はこう言いながら、ふたりをドアの外まで見送った。

11

「佐藤くん……」

九鬼は前に行く佐藤を呼び止める。

丘陵の頂上にある牧草の生えた草原に出たところだった。佐藤が振り向

き、不審な目を向ける。

ふたりは診療所を出ると、大野のいる農園事務所に立寄り、来た道を引返していた。彼は子供たちが通つたらしい山道を下りたかったが、それは車を置いてきたところが分からなくなつてしまつたという佐藤の主張にしたがい、しぶしぶ丘陵の頂上を越えて車を置いてきた道路に出るルートをとつたのだつた。

彼は佐藤の後を歩きながら、山道を下らなかつたことを悔いていた。山道を選べば、もしかしたら、アキラと会えたかもしれないと思つたとじつとしておれない気分が駆られる。彼は何度も引き返そうかと思つた。

佐藤はそんな彼の気持ちを感じてか、ときどき振り返り、覗き込むような目をして彼を見る。彼はそんな視線に気付かない振りをして、もくもくと足を運んでいた。

「やはり、実家の跡地で待つほかないかな。いくら探し回つても、アキラの顔さえ見覚ええないんだから。オレは全く父親失格だよ」

彼は寂しく笑つた。

診療所の医師にアキラのことを尋ねられ、なにも答えることができなかつた。アキラのことはなんでも知つていふと思つていた彼にはことのほかショックだった。顔付きさえ定かでないのに、アキラを探し回つていたので。

彼は自分をなんと愚か者かと思つた。そしてようやく自分が待つことを思いついたのだつた。

跡地には医院として使用していたコンクリートの建物がかるうじて残つていた。これに手を入れれば住むことができるようになるかもしれない。母を病院から引き取つて、一緒に暮らすことにして、アキラを待とう。信二郎夫婦も生きていれば、いつかは戻つてくるだろう。母屋がなくなつて、

母は不満かも知れないが、しばらくは我慢してもらおうほかない。

「それがいいかもしれませんね。今日、もしかしたら、アキラちゃんがお家を見に来ているかも。早く、車に戻って、行ってみましよう」

佐藤に促され、彼も足を速め、草原を横切っていく。アキラの姿が浮かぶ。彼はアキラを追い、駆けるように歩調を早めていった。

第二章

12

「どうだった……」

受話器から斉木の声が響いてきた。

「ああ……」

佐藤は当てが外れたような声を出す。

実家跡でアキラを待つという九鬼をひとり残して帰ってきて以来、彼はずっと電話を待っていた。電話が鳴るたびに九鬼からかと思ひ、急いで手を伸ばすが、いつも裏切られていた。斉木が九鬼の一人息子と出会えたかと聞いていることは分かっても、彼はなぜか素直に應える気になれなかった。

「おい、どうしたのだ……」

「うん、それよりも対策本部のほうはどうなんだ。開店休業じゃあるまいな。それとも首になったのか」

彼には海面急上昇に対する政府の動きが気になっていた。斉木は海面急上昇対策本部の幹事役に狩り出されていたはずではなかったか。目を追うごとに、海面急上昇の影響が深刻化しているというのに、いつも暢気に構えているようにみえる。

日本列島だけではない。この夏に起こったグリーンランド氷床大滑落による一〇メートルを超える海面急上昇が、世界の至る所で深刻な事態を生みだしていた。製品の輸出と食料やエネルギーの輸入に頼っている日本に

は海面急上昇による港湾施設の損壊や使用停止の影響がことのほか大きく、これらがそのままブーメランのように跳ね返ってきはじめている。この意味で、日本は海面急上昇の影響を二三重に受ける状況にあったのだ。

今回の海面急上昇で、世界の陸地が一挙に数パーセント減った。と同時に、世界の富の半分以上が奪われた。

世界中の臨海大都市の多くは水没するか水浸しとなった。超高層ビルは海中に取残され、現代文明都市は海中に浮かぶ幻の都市と化した。また臨海工業地帯も大部分が海中へ没した。かろうじて海面から工場プラント、石油タンクや原料タンクの頭だけを出し、かつての工業地帯だったことを示していた。

しばらくすると、海中に没した工場プラントやタンク類から有害な化学物質や石油などが漏れ出した。臨海部の原子力発電所や原子力施設から高レベルの放射性物質が漏れ出した。

防波堤や岸壁、コンテナヤードなど、さまざまな港湾施設はすべて姿を消し、灯台の尖塔だけが海面から突き出ていた。港湾内を航行する船舶の多くは水没してしまったださまざまな建造物に突き当たり座礁した。海底から突き出ているビルや橋梁に衝突し、転覆するものもあった。海洋を航行中の数万隻の大型船舶は寄港できる港湾もなく、海面を漂流しつづけるほかなかった。

デルタ地帯に広がる肥沃な農地も海中に没し、収穫は皆無となった。デルタ地帯だけではない。臨海部の海拔ゼロメートル地帯はもちろん、一〇メートル以下の農耕地は海面の下となった。

こうして海面急上昇とほぼ同時に、世界人口の約二〇パーセントのんびとが家財や食べものを失い、住処や働き場所を奪われ、難民と化した。だ

が、これらの被害は海面急上昇の直接的被害に過ぎず、これらから生じる間接的な被害は二次三次の影響へと延々とつづくのだ。

「誰にもどうしていいか分からないのだ。まあ、全体の被害状況が分かかってきて、誰もがその大きさに驚き、啞然としていたところかな」

「他人事じゃないぞ。防潮堤をつくるとかいつていたのはどうだったのだ」

彼は斉木の返事に驚く。対策本部を立上げたときは会議でいろいろな意見が出されていたのだ。政治家も大いに口を出し、利益誘導に精を出していたではないか。

「そのときは被害の甚大さに気付かなかっただけだ。政治家の先生方も自分の選挙区のことしか念頭にないタイプが多いしね。でも防潮堤と違って、日本列島の海岸は三万キロを超える。いまの日本にはこれをつくる金も時間も人手もない有様だ。その一方で、日本経済をもとに戻そうなんての議論ばかりだね。海面急上昇後の世界がどんな状況なのか、すっかり様変わりしているのに、そのことには全く頓着せず、世界から食料やエネルギーを輸入できると思っている。いまの政府には実質にもできやしない。ということ、対策本部の仕事は掛け声だけなのだ」

「こうなったからには、日本経済をもとに戻すのではなく、身丈にあった新しい日本をつくることだろう」

「それはそうだが、多くはまだかつての経済大国日本を忘れかねているんだ。『夢よ、もう一度』タイプが結構多い。彼らは経済成長が第一というわけだ」

「外需依存はムリだ。かといって、内需も覚束ない。現実を見なくちゃ」

「そうなんだ。いまにも明日の糧さえ手に入らなくなるといのに、金さえあれば何ともなると思う連中が多くてね」

「……………」

「とにかく、第一に、日本国民の住と食を確保しなくちゃならない。現に、日本列島中に何千万の環境難民が食べものや住処を求めて彷徨っている。彼らをどうするか、これが当面の切羽詰まった問題だ。備蓄している穀物類は乏しい。コメすら心もとない状態だ。今秋の作柄如何では、コメの配給制をはじめなければならぬかもしれない」

食料品類が品薄の状態、買い占めや売り惜しみがはじまり、価格も急騰し出した。食料の緊急輸入が図られたが、輸送や荷揚げの問題のまに、食料を確保することが困難を極めた。急騰し出した穀類はおろか、いかなる食料品も世界的に品薄状態だった。生産設備も海面急上昇で被害を受け、そのうえ、原料不足や価格の上昇が響き、加工食品の生産は落ち込んでいたのだ。食料品の仕入れ難や品不足からコンビニやスーパーの閉店が相次いでいた。

「そのわりに、いたってノンキじゃないか、お前さんたちは……………」

「どういうことだ……………」

「このような状態は一過性と思っているんじゃないのか。何年かすれば解消すると思っているんじゃないのか」

「……………」

「コメの配給制で凌げる事態ではないだろう。職も住処もない何千万人の環境難民を対象に配給制が機能すると考えているのか。机上の空論だ。これからどんなことが起こるか分からず、行き当たりばつたりの対応じゃ混乱が増すばかりではないか。それとも海面急上昇のようなことは二度と起こらないと思っているのか」

「そんなことはない……………」

「だったら、対策本部としてやるべきことはいくらでもあるだろう」

「現状認識がまちまちで、さらに、セクシヨナリズムや利害関係が絡み、方針すらまとまらない。『船頭多くして船山に上る』だ」

「他人事のようなことを言っておれまい。強引にやるほかないではないか。

右顧左眄しているときではない。いまこそ、未来の行く末を見極め、日本の進むべき方針を打ちだすのだ」

「誰が……」

「幹事役のお前がやるほかないだろう。どうせ省益やらの代弁者の集りに過ぎないんだろ、対策本部の面々は……」

日本国中が海面急上昇で慌てふためいているが、日本はいま、存亡の危機にあるのだ。何千万の環境難民の対策を間違えれば、日本は混乱のなかで崩壊への道を辿ることになるだろう。

「かといって、何千万もの数だ。当面の環境難民対策すらどうしていいのか、なかなかの難問だ。食料が不足すれば、ヤミ取引や奪い合いがはじまり、社会は大混乱に陥る。掻払いや略奪が横行し、暴動が起こるかもしれない。とにかく、治安を維持することが先決だが、これさえ大変なことだ」

首都圏が突如沈没して太平洋岸に大津波が押し寄せて大被害をもたらしたが、その余韻もさめやらぬうちに、海面急上昇によって沿岸低地やデルタ地帯の平野部に発達した都市や工業地帯あるいは農耕地が海中へ没した。これによって、ふたたび大量の被災者が発生した。

首都圏沈没時の二千万人におよぶ被災者数を超える被災者たちが日本列島沿岸各地から住処や職を求めて大挙して内陸部の都市をめざして移動した。だが大都市のように大量の人口吸収力はどこにもなく、これらの被災者の多くは難民化し、ホームレスや浮浪者の予備軍となった。

穀物や農作物の今秋の収穫がガタ落ちとなることは目に見えており、今後ますます食料事情が逼迫することは予想された。被災者に限らず、やがて、日本国中で食料不足に見舞われることになることは明白だった。そして彼らの多くが飢えの苦しみに襲われるだろうことは疑う余地がなかった。「国家権力は秩序を維持さえすればいいというものではあるまい。国民の大半は今回の災難を乗り越えれば、もとに戻るのだと思っっているのではない。これが危険なのだ。決してもとに戻ることにはない。われわれにはますます困難な事態が待ち受けているのだ。だから、このことを周知させ、つぎつぎに襲う困難に立ち向かい、われわれが来るべきステップへスムーズに移れるように意識を変えておかなければ、国民は失望から暴徒と化し、政府転覆を図ることになりかねない」

「……………」

「政府として、いま、第一にやるべきことは、これからの事態に備え、新しい社会システムや経済システムを明示して、生き残りのためにはこうするほかないことを国民に訴えることなのだ」

「一体、これからどんな災難がこの国を襲うというんだ。この国はどんな事態を迎えるんだ」

「日本だけの話じゃない。世界は海面急上昇によって、陸地が数パーセント減少したのだ。人口稠密地帯である沿岸都市の多くが水没し、大量の被災者が排出した。また、肥沃なデルタ地帯が海中に没したばかりでなく、海拔の低い平野部も水没するか、水はけの悪い湿地帯と化し、広範にわたる農耕地が喪失したのだ。わが国と同様に、世界各国で農地を奪われた農民らの被災者も大量に発生した。世界の農業生産が著しく減少する一方で、都市部と農村部の被災者が環境難民となって世界中で彷徨う出しているの

だ」

「確かに、世界は海面急上昇で大被害を被った。だが今回の海面急上昇による被害を全く受けなかった国もあるだろうし、軽微な被害で済んだ国もあるだろう。今度はそれらの国々が前面に出て、いままで通りのシステムのもとで世界経済を引っ張っていくことになるんじゃないのか。世界の社会システムや経済システムが急変することは考えられない。まして一八〇度変わることなどありえないだろう」

「甘い。たとえ、世界にいくつかの無傷の国があったとしても、今回の海面急上昇は人類世界の終りの始まりなのだ」

「どういうことだ」

「全体としての世界システムにとっては、今回の海面急上昇被害は根幹を揺るがすほどの打撃となっているのだ。直接の被害がなかった国々といえども、世界システムの一員である以上これを避けることはできない。これらの国がいくら足掻いても、無限性を前提とする以前のモノとカネのグローバル化した世界に戻ることはあるまい」

「なぜだ」

「海面急上昇で発生した大量の環境難民が水や食べものを求めて世界中を彷徨っているが、今後さらに増えることだろう。数億、いや数十億に達するかもしれない。そして環境難民問題は解決されることなく、世界システムを蝕みつつけるのだ。いたるところで食糧争奪戦が起こり、世界は混乱の渦に巻き込まれ、あげくの果てに、世界戦争へと発展することになるのだ」

「なぜだ」

「地球にとつて、われわれ人類がシステム攪乱の原因になっているからだ。」

九鬼先生が『地球の声なき声』を聞いたといっていたら。地球は怒り、システムの攪乱を収めようと動き出したのだ。地球はシステムを攪乱する原因となっている邪魔物を徹底的に払い落としはじめたということだ。地球は有限性を無視して野放図に行動する現代人を放置することができなくなったのさ。これに対して、われわれはどう対処すればいいのか。袖手傍観しては亡びるほかないのだ。それとも甘んじて亡びの道を行くことにするのか」

「うーむ……」

「考えることもないだろう」

「で、どうしろというんだ」

「世界はますます至難な時を迎える。至難につぐ至難が世界を襲うことだろう。そのたびに、世界には環境難民が増えていく。途上国を中心に、環境難民が爆発的に増加する。水も食べものもなく、環境難民となった女子供の多くは飢えの中で生命を失い、一部が暴徒化して世界を徘徊することだろう。このような世界では、いくらモノをつくっても売れないし、食糧を調達することもできない。もはや、これまでの日本経済のような外需依存のビジネスモデルは通用しない。食糧を海外に依存することしてきた日本には、いまや一億総餓死の危険が迫っているのだ。このやせ細った日本列島で生き残るには、無用な争いを避け、互いに肩を寄せ合い、飢えもじつと我慢して、地球の怒りが鎮まるのを待つほかない」

「飽食に慣れた日本人にそんなマネができると思うのか」

「できなければ死ぬほかないのだ」

日本国中を彷徨う何千万の環境難民は住処も職もなく、食べものもなければ何人がこの冬をのりきれるだろうか。この冬をのりきれたとしても、

つぎにくる酷暑の夏はどうか。地球の怒りはまだまだつづくのだ。これらをどうやってのりきればいいのかだろうか。

「いつまで我慢させるのだ」

「短ければ、数十年、長ければ、数百年を超えることになるだろう」
彼は白頭大人と農園を思い浮かべながら、静かに受話器を置いた。

13

「園部さんという方がお会いしたいとお見えになっております」

佐藤は電話のベルに反射的に受話器を取ったが、受付からの電話だった。

九鬼からの連絡を待ち受けている彼は度々期待外れの電話に苛立ちを覚えたものの、園部が面会に来てると聞いて、苛立ちが氷解していくのを感じた。独立行政法人の研究機関に勤めている少壮の地震研究者だ。童顔の園部を思い浮かべながら、彼はロビーへの階段を小走りに下りていく。階段を下りたところで歩調を整え、彼はゆっくりロビーへ向う。エントランス横の一角にある剥き出しのロビーに園部の姿がなかった。彼は戸惑い、辺りを見回す。

「佐藤さん……」

後ろから声があった。童顔が笑みを浮かべていた。

彼は突然の訪問を謝す園部をロビーのテーブルのある椅子へ誘う。椅子に腰を下ろしながら、園部は現在籍を置いている研究所を辞めて、この秋から東北のT大学へ移るといふ。

「T大学ですか。つい最近、あそこの向井教授にお会いしてきましたよ」

彼の脳裏を向井の浅黒い顔が過る。向井の顔とダブって、九鬼の顔が浮かんだ。

「それで、お願いがあるんですが……」

園部は向井の話から九鬼が日本に帰っているらしいことを知り、今日でもお会いしたいという。

「……実は、来春、B大に『地球システム研究センター』を新設することになっていのです。それで九鬼先生に是非お願いしたいことがあるのです」

童顔が紅潮している。九鬼をセンター長候補に推す気でいるらしく、勢い込んで話す園部の顔を眩しそうな目で盗み見ながら、彼はふと、向井教授のところへ九鬼を連れていったのは失敗だったのではなかったかと思つた。

彼は九鬼が研究に興味を失っているらしいことに気付いていた。いまだんなな申し出をしても、九鬼には聞く耳がないだろう。彼も九鬼を日本に留めておきたいと思つていた。だが、一人息子の消息がつかめずにいる九鬼にそんなことはおくびにも出せなかった。

「いい話ですね。でも……」

彼は九鬼の置かれている状況を一部始終を話した。

「そうでしたか。頃合いを置くにも時間がない……」

「九鬼先生はポジションに拘泥するひとではありませんよ。気に入ればどんなところでも研究できるひとですから、別にセンター長でなくとも、時期が来たらそのときの状況でお誘いすれば……。いま、わたしは先生からの連絡を待っているのですが、それとなく話しておきますから、それからではどうですか……」

童顔が一瞬複雑な表情になった。そして、彼をじっと見つめた。しばらくして口を開いたが、園部は全然別のことを口にする。

「気になることがあるのです。実は、地球の自転軸が揺らぎだしているのです。自転スピードにも変化が……」

「海面急上昇後ですか」

「そうです。なにしろ、自転の変化が首都圏沈没の引き金になったと考えられるので心配なんです。九鬼先生にデータを見て欲しいと考えていたのですが……」

「いま、データをお持ちですか」

「データの一部のプリントアウトを用意していますが、パソコンでいつでも取り寄せることも……」

「最近、日本列島近辺で微震動がつづいているのもそのせいですかね」

「多分……、でもいろいろ反論もありますので……」

彼は遠慮がちに呟く童顔に目を据え、目のなかをじっと覗き込む。

九鬼が浮かんだ。何日もなるのに、連絡がないのはまだ居所が決まっていなからだろうか。それとも入院してる母親の容態が悪いからか。それとも毎日アキラを探して歩き回っているのだろうか。

「これから九鬼先生を探しに行きますか」

彼は童顔を見ていたが、しばらくしてぼつんと言う。

大木の杉並木がつづく。

九鬼は見慣れぬ奇妙な風景に、一瞬、道を迷ったかと思いい、足を止める。彼ははじめて通る道だったことに気付き、ふたたび歩みだす。

アキラはこんな気味の悪い道をひとり歩いたのだろうか。通りすがりにアキラらしい小学生の姿を見たという農園の人は中学生のような少年と一緒にだったといっていたが、この辺を通り抜けるときはアキラひとりじゃなかったのか。

彼はまわりに目をやりながら、幾分上り坂の山道をゆっくり歩く。かれこれ二時間近く歩き続けていた。佐藤と来たときの記憶を呼び起こしながら、農園の丸太の木の門を探すが、農園は思ったよりもさらに山奥にあるらしく、それらしきものはまだ見付からなかった。

時折、立ち止まって首筋の汗を拭くことがあるが、アキラに出会うためにはこうするほかしかないとでもいうように、彼は道路に視線を落として、もくもくと足を運び、ひたすら歩く。

汗が背骨の窪みに沿って流れ落ちていく。彼は堪らず、歩きながらベルトの回りから濡れたTシャツの裾を引きずり出して風を入れる。

後ろから音もなく近づいてきた車が彼の横でびたりと止まった。彼は驚いて、顔を上げた。

助手席のウインドーから笑みを浮かべた白髪の老人が覗いていた。彼は佐藤から聞いていた「白頭大人」かと思いい、目礼する。

「どちらへ……。事務所へ帰るところですが、よかつたらどうぞ」

ウインドーのガラスが下りて、なかから声がした。奥でハンドルを握っている日焼けした中年男の顔が笑っている。農園の大野だった。

道路の両側には枯れてしまつて赤茶になった葉をつけたまま立っている

彼は一瞬迷つたが、ドアハンドルに指をかけ、後部座席に滑り込む。ド

アを閉めると、車は音もなく動きだした。

「アキラが歩いたらしい道を確かめておきたいと思ひましてね。取りあえず、診療所の先生を訪ねてみようかと……」

彼はハンドルを握っている大野の背に向かって言う。

「そうでしたか。ところで、こちらは……」

大野は助手席に目をやる。

「九鬼さんでしたか。佐藤くんたちに『白頭大人』と呼ばれているものです」

白頭大人の角張った顔が振り向く。

大野は「お茶でも……」と言いながら、ハンドルを左に大きく切る。

車は道路から砂利道に入ってしまった。

15

「先生がこの農園の生みの親だそうです……」

九鬼は早く暇乞いしなかった。アキラが通ったらしい道を歩いて診療所へ行ってアキラから連絡がなかったか聞きたかった。だが大野はエントランス横のテーブルに彼と白頭大人とを残して奥に行つたきりなかなか戻つてこない。お茶を呑み了えて空になった茶碗を手で弄びながら、椅子から立ち上がるときを見計らっていた。彼はふと視線を感じて目を上げると、彼を見つめている白頭大人の目と合い、苦し紛れに口を突いて出たものだった。

「生みの親ですか。いまは農園を回って生かしてもらっている厄介者です

よ」

白頭大人は人懐こい笑みを浮かべて、彼を見ている。

「自給自足が基本とか……」

彼は自分でもおかしなことを言い出したと思ひながら、白頭大人の優しい目元に誘われるように腰を据える。

「考えの基本は自然を大切に保つことなんですね。人類は自然（地球）に育まれ、地球の生物生態系に育てられたのですから」

白頭大人はつづける。人間は地球の生物生態系のなかで生きてきたのにそれを忘れ、現代文明を振り回して自然を征服し、人間は自らのためにのみ利用してきた。生命の基本である生態系を分断し、ほしのままにいじくり回し、自分の都合に合わせて改変して現代文明の城を築いてきたのだ。

「文明の城ですか……」

彼は海深く沈んでいった現代文明都市東京を思い浮かべた。

「巨大化高度化大量化の限りを尽くした現代都市は貴重な生態系を犠牲にしてつくられたものです。現代の巨大都市は巨大化高度化大量化した経済システムにおける大量消費装置と化してしまつた。というより、むしろ、巨大都市は経済を巨大に成長させるためにつくられたというべきかもしれません。こんなものは人間にとつてどんな意味があるのでしようか。このなかでは人間までが消費財に成り果ててしまつているのに、みんな平気な顔をして動き回っている」

白頭大人はひとり頷き、呟くように「生きるとはどういうことなのかね」と言い、自分の世界に浸り、自問自答をはじめた。

彼の耳には途切れ途切れにしか聞こえてこなかったが、白頭大人の言っていることは大要こんなことだった。

個々の人間は生まれ出た瞬間から、好むと好まざるとにかかわらず、人類という個々を超えた種としての生命体の一員としてその存続のために存在する。だが個々の人間が作り上げた現代文明は現世の個人を中心としたものだが、いつのまにか人間のコントロールを離れ、独自の論理に従い、巨大化高度化大量化へと突き進み、人類の抛り所であり、存続の基盤である地球システムを攪乱し、台無しにしてしまっている。化学合成物質による地球環境の汚染や温室効果ガス排出による地球温暖化などによって地球システムを攪乱し、自然（地球）環境を損傷しているのだ。

いいかれば、人間が自ら種としての人類を無視し、その存続を危ぶませていくということだ。そしていまや、現代文明を武器とする人間と自然（地球）の闘いにまで発展してしまっているのだ。

だがこの闘いは人間そして人類が負けると決まっている無益な戦いにすぎない。それにもかかわらず、人間は勝ち誇ったようにさらなる巨大化高度化大量化を押し進めてきたのだ。

現代文明が巨大化高度化大量化すればするほど、地球システムからのリアクションも巨大化高度化大量化していく。超高層ビルが林立する巨大都市、大量のエネルギー消費、無数の工場や自動車からの大量の排気ガスや廃液、世界人口を何回も抹殺できる大量殺戮兵器、世界に張り巡らされた大型航空機や超大型船舶による空中・海上大量輸送システム、化学合成物質の大量使用、大規模な海上埋め立てや土地造成開発などなど、人間は世界の至る所で地球を痛めつけ、生態系を破壊し、環境を汚染しつづけているが、地球からのリアクションも日増しに強まってきているのだ。

「人間が自ら招いた地球の温暖化にしても、人間が分をわきまえない結果であり、異常な地球温暖化は分を超えた人間への地球からの仕返しと受け

とっていいでしょう。これに間違いないでしょう」

白頭大人はきっぱり言い、目を据えて彼を見る。

「ええ、そう言えないこともないでしょう……」

「地球温暖化や環境汚染が進むなかで、人間が人口爆発と大量消費をつづけば、地球の生態系はますます痛めつけられ、これに地球の仕返しというべきリアクションが加われば、地球上の生態系が崩壊することになるでしょう。現在ですら、食糧不足や水不足で飢餓や飲み水に悩まされて人びとが一〇億から二〇億人もいるというではありませんか。生態系が崩壊すれば、人類も生きていけない……」

白頭大人は呟くように言うのと、遠くに目をやった。

彼には白頭大人の寂しそうな目がまるで「人間は取り返しのつかないことをしてしまった」と言っているように見えた。その瞬間、彼は自分がかんでもなくバカなことをしてきたのではないかと感じた。

この一〇年間、彼は気候変動予測の研究に熱中し、全身全霊を捧げてきた。気候変動による異常気象や極限現象を事前に正確に予測できれば被害を減少させ、多くに人びとを被災から救えるのだ。そうすることが社会全体に役立ち、これが研究者としての努めでもあると信じてきたのだ。

だが白頭大人の目を見ているうちに、彼のところに揺らぎが生じ、次第に大きくくなっていく。地球温暖化による気候変動など地球システムの異常な攪乱現象を可能なかぎり正確に予測して対策に役立てようとするほどの、そしてこれによって大被害を回避できればできるほど、人間はせせら笑い、性懲りもなく、さらに現代文明の巨大化高度化大量化に励むことになったのではあるまいか。気候変動研究を通して、結果的に、現代文明の巨大化高度化大量化を押し進め、地球上の生物生態系の破壊に加担し

ていたのだ。

これまでやってきたことは一体なんだったのか。彼はこの一〇年の日々を振り返りながら、ついに聞いたと思った「地球の声なき声」を思い返した。

「なんてバカなことを……」

声にならなかった。

気候変動の研究は異常気象や自然災害の被害から人びとを救い、社会に役立つはずだと考えて研究を進めてきたものの、実際には、社会も多くの人がとも真剣に受け取らず、対策を講じようとしたとは思えなかった。現に、海面急上昇で地震発生の可能性が高まると指摘してきたのに、多くの人びとが、そして弟夫婦までもが地震による津波の犠牲になってしまったのではないか。これまで奥地まで津波がやって来ることはなかったとはいえ、今回の津波は全くの想定外の出来事でもあるまい。海面急上昇で防潮堤を越えて津波が河川を遡上する可能性が増し、河川を遡上する津波は上流に達すれば達するほど川幅が狭まり、これによって津波の高さが高まり、堤防を越えて溢れ出すことは当然想像することができたはずではないか。彼は考えれば考えるほど、やりきれなかった。

白頭大人の寂しげな目を見ているうちに、自分のやったことは全く独りよがり過ぎなかったのかと思わざるをえなかった。

こころのなかで、なにかが音を立てて崩れ落ちていく。彼が宮々とこれまで積み上げてきたものが崩れ、瓦礫となり、一面に散っていった。やがて、瓦礫も消え、荒涼とした荒れ地が広がった。

彼は堪らずに、そそくさと白頭大人に別れを告げると、外へ飛び出した。門を通り抜け、山道に出た。行き先の当てもなかった。彼はまるでアキラ

の足跡の痕跡を探るように地面に目を落とし、道路を見つめ、ひたすら歩を運ぶ。だがなにも見ていなかった。ただこうするほかなかったのだ。

16

九鬼はアキラの影を追っているつもりで、いつのまにか自分の影を追っていた。

大学の助手からある民間の研究所の研究員となって間もない頃、彼は大量の化石燃料の燃焼による膨大な量の二酸化炭素の放出という人間の行為によって生じる地球温暖化による気候変動が、地球の軌道などの変化にもなう日射量変化とかかわる長期的なサイクルをもつ「緩慢なタイプ」の気候変動」と異なり、ごく短期的なサイクルの「急激なタイプ」の気候変動であることをつきとめたのだ。そしてその予測研究にのめり込んでいき、アキラを身ごもっていた妻亜耶子を一人残して研究環境の優れた米国のA CARへでかけていったのだ。

日本列島は急激な地球温暖化に襲われ、亜耶子は彼の帰国を待たず、アキラを残して、熱中症で逝ってしまう。これにも懲りず、さらなる研究の飛躍を求めて、彼は一人息子アキラを母に預けて、数年の長期にわたり、ふたたびA CARへと出掛けていたのだ。

「アキラ、どこにいる……」

彼はこころのなかで叫ぶ。研究がようやく一段落して、ついに「地球の声なき声」を聞いたと思えたとき、宮城県沖で大地震が発生した。海面急上昇でやせ細った日本列島

では津波が内陸部の奥まで押し寄せ、彼の故郷を襲ったのだ。実家は流され、弟夫婦が行方不明になった。母も記憶喪失に陥り、アキラの行方もいまだ分からない。彼は急ぎ帰国したものの、いままって安否が分からず、アキラや弟夫婦を探しつづけていたのだった。

なかなか見付からないことに失望し、動き回るアキラに苛立ちすら覚えていたものの、「地球の声なき声」を聞いたという思いがあつて、ここらどこかに研究が一応の成果をえたことにある種の達成感すら感じていた。それは浮遊感に似た感覚だった。

白頭大人に会うまでは、彼は密かに浮遊感に浸り、失望や苛立ちを紛らわしていたのだった。

「地球の声なき声」を聞いたという思いが彼を狂わせていたらしい。白頭大人の顔を思い浮かべ、彼はふたたび自分を省みる。

亜耶子が残していった生まれたばかりのアキラを抱え、母のもとへ帰った日を思い浮かべた。あのとき、彼は研究にところを奪われ、身重の妻の側についてやらなかったことを悔いた。自分が妻を死にやったと責め、二度と研究を行なうまいとこころに誓ったのだ。だがそれもつかの間、彼は教授と呼ばれて大学に戻った。亜耶子の兄であり、彼の指導教官でもある教授は彼の才能を惜しんで呼び戻したのだった。彼は気候変動の予測に欠かれないシミュレーションモデルをつくることがずば抜けてうまかった。

大学の戻っても、しばらくの間、彼は研究を再開することはなかった。かといって、生まれたばかりのアキラの世話をするともなかった。男手の育児を心配して一緒に連れ立ってきた母に任せきりだった。年老いた母にとつて、都会の小さなマンションでの育児は並大抵のものではなかった。

ついに音を上げ、母はアキラを連れて実家へ帰ってしまう。実家では弟

夫婦が家を継いで、医院を開業していた。弟夫婦には子がなかった。

弟夫婦がアキラを可愛がってくれることをいいことに、彼はアキラを家に預け放しにし、日本列島を熱波が襲うなかで、気候変動の予測研究を再開する。彼はふたたび研究にのめり込んでいく。

教授が洪水の犠牲になり、佐橋祐子が事故で死んだ。彼はそのときなにもかも捨ててしまったのだ。大学を辞め、社会的地位も研究を捨てた。

だが彼はほどなくして、誘われてACARへ向った。そして数年間、ACARに留まって研究し、日本に帰ることはなかった。

「ヒロシ君は……」

彼は佐橋祐子の死を思い返したとき、彼女に一人息子の連れ子があつたことを思い出したのだった。

彼は佐橋祐子に連れられた小さなヒロシを思い浮かべる。あのとき、ヒロシは保育園か幼稚園に通っていたはずだ。とすれば、いまごろは小学校の五、六年生か、あるいは中学生になっているのか。

突然、アキラが中学生の年頃の少年と一緒にだつたらしいことが思い出された。

「もしかしたら、アキラはヒロシ君と一緒にだつたのか……」

こんなことはありえないことだ。アキラはヒロシを知るはずはないし、ヒロシがこの辺をさまようはずがないでないか。彼は頭で否定しながら、こころでは完全に否定していなかった。もし佐橋祐子が生きていれ、彼は彼女と再婚することになったかもしれない。もしそうならば、アキラとヒロシは……、彼は頭を強く振る。

「アキラ、どこにいるんだ……」

彼はなんとしても探し出したかった。だがこころのどこかでアキラと再

会することはないだろうと感じていた。

なにもかも捨てて米国へ旅立ったとき、彼は決して日本を振り返ることはなかった。弟夫婦がアキラを可愛がり、養子に欲しがっているのを承知していたし、それならそれでもいいと思っていたのだった。

「あのとき、お前はアキラをも捨てることにしたのだ……。それなのに、お前はなにをいままさら未練がましくアキラ探しをつづけるのだ……」

なにもかも捨てて日本を発つたとき、彼は一人息子のアキラをも捨ててしまっていたのだ。彼はようやくこのことに気付いたのだった。

「あのとき、オレはアキラをも捨てたのだ……」

彼は自分を許すことができなかった。一度捨てたアキラを探す偽善ぶりが鼻についてならなかった。一人息子まで捨てて、研究に打ち込み、つい「地球の声なき声」を聞いたと思っただけでいい気になっていた自分を許せなかった。

彼は自分が嫌でならなかった。ここにいるのが辛かった。早く、誰もいない遠くへ行ってしまうかった。

17

日は陰り、時折、冷たい風が九鬼の頬を撫でる。

彼はなにも考えることなく、ひたすら山道を歩いていく。こうすることがアキラと巡り合う唯一のやり方でもあるかのように、彼は夢中で足を運ぶ。

日が落ち、夕闇が迫る。

彼は道端を歩き続ける。次第に、闇が彼を包んでいく。それでも彼は歩調を緩めることはなかった。

彼には闇の向こうに輝く明るい世界があるように闇が透けて見えた。

車が音もなく彼の横に止まった。後ろから車のヘッドライトが近づいてきたのだった。

車のドアが開いて、一人の男が飛び降りて、彼に近づく。

「九鬼先生……」

佐藤だった。

彼の手を取り、車の後部座席へ導く。助手席に一人の男がいた。彼を見て振り向き、会釈する。暗くてよく分からなかったが、斉木らしい。彼は座席のシートに身体を沈めると、目を閉じた。疲れがどっと出た。

佐藤はハンドルを握りながら、白頭大人に会いに来たのだという。彼が飛び出していたと聞いて探していたらしい。

彼はうつらうつらしながら、佐藤の声を聞いた。

車は山道を引き返し、山道から逸れて農園の門を通り抜けていった。

「ところで、九鬼先生。いつぞやおっしゃっていた『声なき声』をお聞かせ願えませんか」

佐藤を相手していた斉木が急に向きを変え、九鬼の顔を覗く。

三人は農園の食堂で夕食を了えると、宿泊用のバンガローへ移った。バンガローには二間つづきの板張りの部屋にトイレの簡単な造りで、風呂や食事は母屋でとることになっている。

土間に近い板の間の一間には入れ口側に囲炉裏があった。三人は火のない囲炉裏を囲んで座って雑談を交わしていたのだ。

「あの話はヤメにしました」

「え？ どうしてですか……」

斉木と佐藤が同時に言う。

「予測研究を止めることにしたからですよ」

「ホントですか……」

佐藤が疑わしそうな目をして、九鬼を見る。

「それじゃ、これまでの知見で結構ですから、今後、日本列島で生起すると予想される異常現象は……、たとえば、異常気象や巨大地震は……」

斉木はなんとか「声なき声」を聞き出そうともがく。

「それを聞いてどうなさるのですか。これまで政府は対策らしいものはないにしても、行政をつかさどる誰もが行動を起そうとしないではありませんか……」

彼は斉木から目を離し、遠くを見た。彼の脳裏に故郷を襲った巨大津波の爪痕がまざまざと浮かんだ。

海面急上昇で地震が起きやすくなっていると警告しても誰も見向きしなかった。ちよつとした関心と想像力があれば津波が河川を遡して奥地を襲うことは十分予想できることではないか。これまで何度思ったことか。彼はまた同じことを思い、憤る。

「そんなことはありません。いろいろやっています。でも、住民が動こうとしない。いくら旗を振っても、積極的に応じてくれない。たとえば、避難警報を出しても、実際に避難するひとは二割にも達しない有様です。とにかく、住民が動かない」

「動かそうとしないからじゃないんですか。動かそうとする努力が全然足りません……」

「……………」

「この国を動かしているのは、一体、誰ですか。政治家ですか、それとも官僚ですか。政治家は選挙のことばかりで、自分の地盤や権力保持には熱心なのですが、住民全体のことはどうですか。官僚は縦割りを堅持し、省利省益には熱心でも、この国をどうすべきかについては関心がないようですね」

「いや……」

「大体、地球温暖化に真剣に取り組んできたと言えますか。この国の政治家も官僚も真剣味が足りない。なかには一生懸命なひともいるようですが、まだまだ足りません。どこか斜に構えている。経済関係官庁はいつまでも明治維新来の富国強兵思想に凝り固まっているようですね。この一派が企業や財界と組んでいままも地球温暖化対策の骨抜きを担っているのではありませんか。この有限の地球で、いままさら富国強兵や貿易立国一本槍でもあるまいのに。このような行動が間違っていることを地球温暖化が証明しているのに気付こうとしない。その結果、日本列島には大量の難民が発生してしまっている。日本列島ばかりじゃない。全世界で何億何十億もの環境難民が発生しているではありませんか」

彼はじつと斉木を見つめた。怒気を含んだ目があった。突然、彼の脳裏に難民の群れのなかで飢えてひもじい思いできよろきよろと食べものを探しているアキラの姿が浮かんだ。彼は顔を歪めた。

「とにかく……」

「そう、とにかく、このような有様を座視すべきではないですね。地球も限度を超えた人間活動をこれ以上放置することはできません。地球はなんども異常気象を起して警告を重ねてきたのですから……」

「あれが地球の警告だったというのですか……」

佐藤が口を挟む。

「そういうことです。人間はその警告に気付かず、いや、気付いていながら、自分の強欲さ抗しきれず、傲慢にも地球の有限性を無視して、あくまで限度を超えた活動を重ね、現代文明の巨大化高度化大量化を押し進めたということですよ。それで、地球はついに有限性を無視してつづける人間活動を抑えにかかった。そのひとつが今回の海面急上昇です。これで人間活動の三〇パーセントほどが抑止されたでしょう。それでも人間はまだ懲りずに、ふたたび巨大化高度化大量化を押し進めようともがきつづけているようですね。地球はもう容赦をしないでしよう。地球はすでに『正常化』への舵を切ったわけですからね」

「正常化？」

「そうです。地球は異常な人間活動によって生じた地球システムの攪乱を是正してシステムの平衡化を目指したんです。このためには人為的な原因に起因するこの地球温暖化を処理することからはじめることですよ……」

「それでどんなことが……」

「心配なのは人間の対応です。海面急上昇で人間活動が減退したものの、環境難民が大量に増えていることです。海面急上昇の結果、肥沃なデルタ地帯や低地が水没し、大量の農地が喪失したので、世界の食料生産が急減し、食糧不足が生じ、全世界にわたって大量の飢餓人口が発生することです。このため、世界の至る所で食糧の奪い合いが起き、一触即発の事態が発生するでしょう。小競り合いから戦争へと発展するものが多いでしょう。小規模の戦争で方が付けばいいのですが、大規模な戦争から核を使う世界戦争へと発展するかもしれない。こうなれば、人類は自滅するほかないだ

ろう……」

「そんなことにならない方法はないんですか……」

「日本が世界で食糧を漁るようなことをせずに、やせ細った日本列島で前でなんとか生きていく道を探り、世界にその方法を提示できればいいのですが、時間はあまり残されていません。白頭人流の農園活動を通して食料やエネルギーを自給自給するというのはどうでしょうか。もちろん、環境に優しい自前の技術開発を通して実現を目指すのです」

彼は自分でも分からないようなことを口走っていた。

だがそんなことがこの国に可能だろうか。今回のグリーンランド氷床滑落で海洋熱塩大循環システムが機能停止の危機あり、今後、世界の気候は寒暖の差の激しい凶暴な天候がつづくことだろう。さらに、南極の氷床は大量滑落もつづくのだ。地殻が動き、火山の噴火や地震がつづく。天候はますます不順となり、大雨や日照りがつづいたり、気温の寒暖の差が激しく上下する。こんな環境で農作物は果たして満足に育つだろうか。世界の食料生産は落ち込み、食糧が不足し、飢餓人口が増大していくことだろう。このような世界で、どうすれば人間が争わずに生きていけるだろうか。その方法はあるだろうか。

「日本が世界に見本を提示するのですか」

「そうできるようにすることです。なんととしても、そうしなければ先がないのですから。これが最後のチャンスかもしれないですね。いいですね」

彼は内心もう手遅れかもしれないという思いが強かった。グリーンランド氷床が滑落してしまつてはもはや手の打ちようがないのではないか。

グリーンランド氷床の短時間での全滑落は、地球システムに取り返しのつかないダメージを与えてしまつたにちがいない。そしてついに地球シス

テムの大攪乱がはじまったのだ。彼には「地球の声なき声」がそのとき発せられた地球の悲鳴のように思えて仕方がなかった。

「どうすれば……」

「白頭大人がいう『生態系を基本として生きる』ことでしょう」

彼は白頭大人の寂しげな横顔を思い浮かべながら、いささか自信なげに細い声でぼつんと言う。

彼は人類が生き残るためのキーワードは循環、共生、連帯であり、現代文明が変わる新しい文明のキーワードでもあると思っていた。これには白頭大人が言うように、生物生態系を基本とすることだろう。地球の生物生態系には循環、共生、連帯の三つの原理が宿しており、構成する生物群はこれらをキーワードに生きている。エネルギーや物質を循環させ、生物たちは互いの力を合わせ、環境条件に合わせて営みをつづけ、生態系を維持しているのだ。だが現代文明のもとで欲しいままに地球を搾取して資源やエネルギーを浪費きた人間に、このようなことが果たしてできるだろうか。浪費に慣れた現代人に大量消費大量廃棄を止めてつつましく生きることができるだろうか。

「現代文明を全否定しろということになりますか」

佐藤があらぬ方を見ながら、呟くように言う。

「それはできない。抵抗勢力が必死で現状変化を拒み、既得権を守ろうと嘯みついてきますよ。なにかいい方法がないですかねえ……」

斉木は他人事のように言い、彼の目を覗く。

「世界がどんな状態なのかやつらには分からないのか……。世界の余剰食糧は瞬く間に底を突き、穀物価格は急激に上昇することになるのです。とにかく、売る食料がない状態になる。洪水、日照不足、日照りで農作物は

育たず、世界的に不足状態が長期間にわたって継続する。かつての食糧輸出国には環境難民が大挙して押し寄せるでしょう。日本はどうあがいても食糧を手にすることができなくなるのです。いまから十分な手を打たなければ、毎年、一〇万から一〇〇万の餓死者を出すことになるにちがいない。食糧不足だけでは足りない。天候不順で、雨が降らない期間が長期にわたってつづくことも考えられます。そのうえ、火山地帯にある日本列島では噴火や地震も襲ってくるし、地球システム大攪乱で地殻大変動が起きないとも限らない。地軸や極移動、あるいは地球に降り注ぐ宇宙線の増加や隕石などの宇宙からの厄介な招かざる客が襲ってくるかもしれない。これは冗談としても、さまざまなウイルスやバクテリアが現れ、予期しない感染症が蔓延する可能性は極めて高いのだ。このようななかで生きていかなければならないんだよ……」

彼はアキラたちの未来がこのような世界だと思いたくなかった。だがこれがいま考えうる未来の姿だった。彼はせめて日本列島中に白頭大人の農園が広がっていくことを祈りたかった。彼にはそうするほかなかった。

「これが『声なき声』ですか。人間をとことん苦しめようというわけですか」

「人類は地球に生み育てられたのに、地球を台無しにしてしまった。地球はこれを元に戻そうとしているだけです。その過程で人間がどうなろうと、地球には関心のないことでしょう」

地球システムが大攪乱を起してしまつた以上、もしかしたら短期のサイクルである急激なタイプの気候変動から別の長期のサイクルの地球の仕返しへと変わってしまったかもしれない。地球がもとに戻るまでには、何回もの氷河期を重ね、その度に地球は氷に覆われ、極冠に氷床が形成されて

厚さを増していき、その間、激しい気候変動を繰り返すことになるだろう。

人間は性懲りもなく、現代文明の巨大化高度化大量化に現をぬかし、何度となく発せられた地球からの警告を無視し、まだいいだろう、もう少し後にしようとして先送りを繰り返しているうちに、地球システムが攪乱を起し、人間の力ではどうにもできないところまで来てしまっていたのだ。ここにくるまで、何度も引き返す機会があった。だが現代文明に溺れきった人間は現代文明の力を過信し、一度も引き返そうとすることはなかったのだ。

「いまから白頭大人流の生き方をすれば、まだ間に合いますか」

「さあ、全世界がそうやったとしても間に合うかどうか分かりません。もはやなにをやってもムダかもしれない。でも生き残るためになにかをやるとすれば、残された道は多くはありません。白頭大人流が唯一とは言いませんが、日本にとってこれに勝るものはいまのところ考えられないんじゃないでしょうか」

彼はなす術が無くひとり深淵に沈んでいくような無力感を味わっていた。それでもこうするほかないと思う。

そうはいつでも、全世界がそうするとは考えられなかった。だが生き残ろうと考えるならば、こうやってじつと地球の怒りが鎮まるのを待つほかないのだ。いまのやりかたは先のない世界での最後のどんちゃん騒ぎのようなもので、これをつづければ自ら自滅を早めるだけなのだから。

彼はそうするほかないのだというように、佐藤と斉木の顔を交互に見ながら、何度も頷いていた。こうすることによって、彼は自分にも言い聞かせていたのだった。

18

九鬼はベッドに入ってから、寝つかれず、輾転とした。

とうとう来るところまで来てしまったという思いが強かった。なにがどうということではないが、最後のステージに立たされているような気がした。今更、逃げることも隠れることもできなかった。スポットライトを浴びて動き回ることになるのか、それとも暗闇のなかで息絶えていくのか。

地球はシステムの大攪乱を通してシステムの再編成に着手したのだ。これからはじまる地球システムの再編成の過程はどんなものになるのだろうか。彼は気候変動予測モデルの開発から地球全体モデルの構築を試みてきたが、それはまさに地球システムの再編成過程の予測の試みでもあった。そしてついに、彼は地球の『声なき声』を聞いたのだった。いや、聞いたと思っただけ過ぎなかったのかもしれない。

それは厳正に以前の状態に戻るための地球の行動計画であった。それは地球システムの攪乱原因の徹底的な排除活動であった。これは彼を絶望へと追いやるものであった。彼は何度もこうなるまえになんとかできなかつたのかと思わざるを得なかった。

現代文明を享受してきた人間に現代文明を放棄することはできなかった。さらに現代文明を満喫するために、文明の場である地球に一顧だにせず、文明のさらなる巨大化高度化大量化を押し進めた。人間はますます現代文明に溺れ、現代文明にとつぷり浸かり、現代文明に溶け込んでいった。

もはや、現代文明と人間を分離することが出来ず、人間は現代文明そのものとなってしまうのだ。

地球が地球上から一切排除することを決めたのはシステムの攪乱因子で

あり、それは言うまでもなく、人間の所産である現代文明そのものだった。これによって、現代文明ともども人間も排除されることになるのだ。

彼はベッドのうえで輾転とする。

いつの間にか、窓が白みだしていた。彼は静かにベッドを抜け出す。ドアを開けると、夜の残骸が消えていくところだった。

彼は静かにノブを回し、音がしないようにドアを閉じた。

19

「九鬼さん……」

診察時間までかなり間がある。エントランスホールには人がなかった。彼は肩を落とし、ホールを横切り、エレベーターへ急ぐ。後ろから声がした。振り返ると、受付に顔見知りの看護師の顔があった。

「原田先生が探していました……」

農園のバンガローを抜け出してから何時間歩き回ったのだろうか。気が付いたとき、いつのまにか母が入院している病院のまえにいたのだった。彼は無意識で母の病室へ行こうとしていたらしい。

エレベーターから降りると、受付から連絡があったのか、ナースステーションのカウンターのまえに若い看護師が待ち構えていた。母の容態が急変したという。

原田医師とふたりの看護師がベッドの側で患者を見守っていた。彼は急いで母に近寄った。

「心臓が急に弱ってきているようで……、一時は危篤状態でしたが、マッ

サージで回復したところです。そばにいらして下さい」

気付いた原田はベッドから離れたところに彼を呼び、耳打ちする。

「そうでしたか」

彼は母のそばによって手を取り、両手で擦る。良子は目を閉じたままだ。寝息が微かに漏れている。

心拍の波形を見ながらしばらく患者の様子を伺っていた医師が、やがて看護師とともに去っていく。

彼は母の手を擦りつつづける。寝息が消えた。時折、目を開けるが、意識は混濁しているのか焦点が定まらない。

彼は母の手を握ったまま、目を閉じた。

「アキラちゃん、おばあちゃんはここよ。遠くへ行っちゃダメ……」

突然、耳元で母の声があった。

顔を上げると、母が目を大きく開けている。いつの間にか、彼は眠りにおちていたらしい。

良子が目を大きく見開き、じつと彼を見た。

「陽一郎……」

母は彼の手を強く握り返してきた。目が潤み、涙が一滴頬から耳元へ流れ落ちた。

意識が戻り、記憶も取り戻したのか。彼は母の痩せ手を両手で固く握りしめる。彼の頬を涙が流れとなって落ちていく。

涙で霞んだ視野の中で、母が微笑んでいる。いや、微笑んでいるように見えただけだったかもしれない。涙が止まってくつきりと顔が見えたとき、

母は目を閉じ、微かな寝息を立てていた。

彼は一日中母の骨と皮だけにやせ細った手を取り、愛おしそうに擦った

り、ときには強く握りしめたりした。良子は目を開けることはなかったが、時折、笑みを浮かべるような表情を見せることがあった。それに合わせて、彼は軽く力を入れて手を握り返し、低い声で呼びかける。

佐藤が帰途、斉木を伴って見舞ったときも、彼女は眠ったままだった。

良子は一昼夜眠りつづけ、一度も目を開くことはなく、翌朝、静かに息を引き取って逝った。

彼は誰にも知らせず、一人だけで母良子の密葬を済ませた。

第三章

20

「先生、お待ちしていたのです。地球がとてもおかしな動きをしているので……」

九鬼は椅子に腰を掛けたまま、声の方へ振り向く。園部の童顔があった。

園部に熱心に口説かれたうえに、佐藤の口添えもあって、彼は一応、特任教授として大学に籍を置くことにしたものの、気が向けば研究室に出る程度で、減多に出ることはなかった。園部はそんな彼を毎日待ち構えていたらしい。

「そうですか」

彼は氣のない返事を返す。

母の死後、佐藤と前に訪れた農園に加わることにしたのだった。いまでは農園の一員となってアキラが手当てを受けた診療所の近くに住み込み、殆ど毎日、専ら農園の仕事に従事して終日を過ごした。

「日本列島周囲での微震動が大分まえからつづいているのですが、世界各地からもそのような報告がありました……」

彼は黙ったまま、童顔をじつと見た。米国へ飛んで、ACARまで彼に会いに来たときの顔だ。全然変わっていない童顔を彼は不思議そうに眺めた。園部が会いにきてから何年も経っている訳でもないのに、彼にはずつとまえの出来事のような気がするのだ。

「それは当分つづくでしょう、そのあと……」

矢継ぎ早に日本列島を襲った熱水塊や焦熱熱波、あるいは超巨大台風や狂風豪雨といった異常気象は、相変らず時や処を変えて襲いつづけていたが、首都圏沈没から海面急上昇へと日本列島は全く新しい局面を迎えつつあった。

だが日本列島のみのことではなかった。それは全世界へと広がる地球温暖化の果てに生じた新しい局面であった。

グリーンランド氷床の大滑落は地球温暖化の果てに地球上に生起する大イベントのはじまりの合図だった。それはまた地球システムに対して次元の異なる新たな局面を呼び起こす要因のひとつでもあった。

「そのあとにですか……」

園部が彼の顔に目を据えたまま、繰り返す。

「これらを個々の現象として見ていては分からないだろう。地球全体の動きとしてとらえることだ」

彼はこう言いたかった。だが黙ったまま、園部の目を外す。

今更なに言っても手後れなのだ。地球温暖化は気温上昇をもたらし、熱波などの異常高温現象、降水量の異常な変化や台風の超大型化といった異常気象を頻発させた。この段階ならまだ間に合ったかもしれない。だが地球温暖化はこういった気候変動の段階をすでに超えてしまっていたのだ。

地球温暖化はすでに大気圏（大気システム）を攪乱し、水圏（海洋システム）を攪乱していた。大気システムや海洋システムといった地球システムのサブシステムの攪乱はそれぞれの個々のサブシステムの攪乱ではおさまらなかつた。これらがさらに地球システムに影響をおよぼし、地球の自転に影響がおよんだ。そして地球の自転速度の変化は地球の内部、ことに、地殻の変動やマントルの流動にも影響をおよぼしていったのだ。

大気の攪乱が海洋へ影響をおよぼし、海洋の攪乱が大気へ影響をおよぼす。さらにこれらの現象が地球内部へ影響をおよぼしていくのだ。地球システムという全体システムでは大気や海洋といった部分を構成する個々のサブシステムを総合・融合して全体としてのシステムを構成している。それゆえに、個々のサブシステムの攪乱現象は当然全体システムへ影響をおよぼすことになるのだ。

大気システム、海洋システム、地殻システムといった地球システムの個々のサブシステムの攪乱は単なる個々のサブシステムの攪乱に止まらず、やがて地球全体システム（トータルシステム）の攪乱を呼び起こしていくことになった。と同時に、地球全体システムの攪乱は個々のトータルシステムに対しても影響をおよぼす。地球システムにおいては、トータルシステムとこれを構成する個々のサブシステムは相互依存関係にあるのだ。たとえば、大気システムの変調が海洋システムや地殻システムへ影響をおよぼすとともに、地球全体システムにも影響をおよぼすということだ。

「地震や火山噴火が頻発することになるのですか。そして地殻変動が……」
「もちろん、そうですね。それで済まないでしょう。いまは地球システムが攪乱し、システムに変調が生じている状態ですが、地球システムは攪乱を抑え、安定（平衡）状態への回帰を目指すことでしょうか。その過程が問題です。その過程で人類が果たして生き残ることができるか……」

彼の目は園部の目を通り抜け、遠くを見ていた。彼はそのとき「地球の声なき声」を思い出していたのだ。

地球はシステムのリセットボタンを押したのだ。こうして地球はすべてのデータを消し去ってしまうことだろう。人間が営々と築き上げてきた文明は痕跡も跡形も残さず消え去るだろう。

「その過程ではなにが起こるといえるのですか」

「それはこれから矢継ぎ早に起こることです」

こう言うと、彼は口を固く閉じた。園部が何度聞いても、彼はそれ以上のことは言わなかった。

21

突然、大粒の雨粒が落ちてきた。

「雨だ。雨宿りしよう」

男が女に言う。

「濡れてもいいの」

女は顔を空に向けて。顔で雨滴がはねる。

「ずぶ濡れになるぞ」

日照りがつづき空から乾いていた地面に雨粒の跡ができた。

雨が本格的になった。次第に激しくなっていく。

「早く。土砂降りになる」

男は女を促し、駆け出した。

日本列島の天候は東日本と西日本を境にして二分されてしまった。時折、逆転するときもあるが、西日本で一日中日照りでも、東日本や北日本では厚い雲に覆われ、雨模様が多かった。そんな天気は何日もつづくのだ。

西日本一帯では何日も日照りがつづき、雨が降らなかつた。農作物は高温障害や干害で全滅した。飲み水さえ事欠き、各自治体では水の手配に追われた。住民のなかには水疎開するものまで現れた。

はじめはぼつぼつと降り出した雨はすぐ本降りとなった。ほどなくシャワーのような雨になった。一時間一〇〇ミリの雨を降らせた雨雲が消えると、強い日射しが戻った。そして何日も日照りがつづく。

思い出したように降る雨はいつもこんな調子だった。

日本列島では天候不順がつづき、東日本と北日本では日照不足、西日本で水不足が常態化していた。農作物が育たず、凶作がつづいた。

「一体、先生はどこにいらしたのですか。こんなときに……。それにしても日本列島はどうしてこんな天気……」

ソファの左端にちよこんと腰を下ろしている佐藤が目を上げ、九鬼の目を見た。横に斉木の姿があった。そのせいか、いつもならソファの真ん中に腰かけ、小柄な身体で大きく構えているのに、斉木に比べ一層小さく見える。

ふたりは何度も彼を研究室に訪ねたが、いつも留守だったという。園部から連絡を受け、ようやく彼に会えたせいか、佐藤の口調に恨みがましい響きがあった。

「まえに話したことなかったかな……」

「え……」

ふたりは顔を見合わせる。

「グリーンランド氷床の大滑落のせいだよ」

彼はぼつりと言う。

「グリーンランドですか」

「それが変なら、地球温暖化のせいと言ってもいい……」

嘩然としているふたりの顔を見ながら、彼はこうつづけた。

地球温暖化の果てに、グリーンランド氷床が大滑落を起こし、大半が海中へ落ちた。莫大な量の水が海へ落ちたせいで海面が急上昇し、世界中で臨海低地が海中へ没した。これで世界の陸地が数パーセント喪失した。世界中で、臨海都市や臨海工業地帯、あるいは港湾施設や海上油田などの海上施設、さらに、デルタ地帯の肥沃な農耕地などが一瞬にして海中へ没して壊滅した。

だがそればかりではない。それよりもこれからじわじわとやってくるいわば後遺症とも言うべき影響の方が恐いのだ。

「いま起きている日本列島の極端な天候不順がグリーンランド氷床大滑落の後遺症のひとつだと言われるのですか」

斉木が口を挟む。

「その通り……」

彼はつづける。

海へ落ちたグリーンランド氷床が溶けると、真水となる。真水は海水よりも軽いので、海面の表面に浮く。大滑落後、グリーンランド氷床は大小の氷片を含む巨大な水塊（大量の真水）となって彷徨い出した。ひとつは北大西洋へ、もうひとつは太平洋へ向い、途中でさらにいくつかに分割した。そのなかのひとつが日本列島に近づき、三陸沖附近に停滞しているのだ。

このことが日本列島天候不順の一因だった。それと北大西洋へ向かった低水温真水水塊が海洋三次元熱塩大循環のエンジン役となる超重量級海水の生成を阻害しているのだ。その結果、海洋大循環機能が弱体化してしまい、地球上における熱の移動が円滑にいかないのももうひとつの大きな要因になっていた。

とにかく、海面急上昇以来、地球上における熱分配システムに機能不全が生じてきているのだ。

「熱分配機能不全症候群ですか」

「ということだ。グリーンランド氷床が溶解してできた冷たい真水の巨大冷水塊は海中でなかなか拡散しないのだ。しばらくは真水のまま低水温水塊として海洋の表面を彷徨いつづける。グリーンランド氷床大滑落は海面の急上昇だけではおさまらず、さらにいろいろな影響をおよぼすのだ。これからも思ってもみないようなことが起こるだろう。気候異変を激化するほかに、海洋生物生態系への影響も見逃ごせないだろうし……」

水塊は低水温であるばかりではなく、真水なのだ。真水は塩水である海水より軽いので海面の上の方に浮き、海水に蓋をする状態になる。これによって、巨大低水温水塊の真下の海洋生物は影響を受け、固体を減らしたり、逃げ出したりして生息生物が変化して生態系が被害を受けることになるだろう。海洋生物は真水のなかでは生存できないし、真水の蓋は海水への大気中の酸素などのガスの溶解を妨げ、酸欠状態を招きかねない。また真水と海水の間には層ができ、それが壁となって熱や物質の移動を妨げる。「なるほど……。真水の冷水塊のひとつが北日本の太平洋側にでんと居座っているというんだな……」

「そうだ。それに……」

「まだあるのか」

佐藤の声が大きくなった。

「グリーンランド氷床の氷には何十万年もの間の大気中の物質が取り込まれている。ガスや微粒子、ウイルスやバクテリア、微生物などだ」

「それらが飛沫とともに日本列島に飛来するというのか」

「ということだ……」

彼は目を佐藤に据えたまま、遠くを見ていた。

氷床溶解でできた水塊はいずれ世界各地へ流れていくのだ。いま日本列島に接近している巨大低水温水塊もさらに南下していくことだろう。そのとき、水塊のなかに未知のウイルスや凶悪なバクテリア、あるいは有害な物質が潜んでいたとしたら、一体、どんな事態が生じることだろうか。目を覚ましたウイルスやバクテリアが人間に対して襲いかかってくるようになるのか。未知のウイルスや未知の生物への対抗手段はあるのか。

声には出さなかったが、彼は「そのときはそのときだ」と思った。

「これも人間が自ら招いたことですか」

佐藤が吐きすてるようにいう。

「……………」

彼はじつと佐藤を見た。小柄な身体がひとまわり小さく見える。

突然、ドアが開いて、男が飛び込んできた。

「九鬼先生……」

童顔を紅潮させた園部だった。

「先生、噴火が……」

園部は彼のまえに突っ立ちまま、口を震わせている。

「噴火が、どうしましたか」

彼はとうとう来るものが来たと感じたが、殊更ゆっくりとした口調で尋ねる。

「各地で噴火が……」

世界の火山が同時に大噴火したという。

「やはり同時噴火か……」

「いまのところ、インドネシアのジャワ半島、極東ロシアのカムチャッカ半島、北米西海岸の火山が噴煙を上げているのですが……」

「日本列島では……」

斉木が腰を浮かし、童顔に詰め寄る。

「間もなく、浅間や富士山が噴くでしょう。九州や北海道でもいくつかの火山が噴き出すでしょう……」

彼は目を白黒させている園部に代わって、低い声で応える。

「さっき、先生は『やはり同時噴火か』と言いましたね。このことを予測していたのですか」

「ええ……」

彼は短く応え、斉木の目を見た。

グリーンランド氷床の大滑落によって莫大な量の氷が一挙に海洋へ滑り落ちた。そのときから、彼はこのことを地球モデルでシミュレーションを繰り返して、予測していたのだ。

グリーンランド氷床の大滑落によって海面が急上昇したが、と同時に、北極圏はこれまであった巨大な氷床の重しが取れ、急に身軽になった。このことが地球の自転に微妙な影響をおよぼしたのだ。全世界で発生していた微震動はそのひとつのあらわれだったのだ。

だがそれで収まらない。グリーンランド氷床の喪失によって生じた自転軸の揺らぎが自転の回転のたびに次第に大きくなり出していくのだ。このことが地球内部のマントル流動に影響をおよぼし、マグマを地表へ押し上げていく。

マグマの押し上げ圧力は北半球の中緯度を中心に強く現れ、まず、北半球の火山帯で噴火を促す。それで収まらなければ、マグマの圧力は次第に

南半球へと波及していく。

これが今回の北半球での同時噴火を呼び起こしたものだ。

「同時噴火のつぎは……」

「巨大地震ですか……」

「プレート附近での……」

マントル流動の変動は、また、地殻プレートを揺るがすことになるのだ。マントル変動は自転速度の変動に呼応してゆっくりとした動きではじまるが、津波のように、確実に地殻プレートを押し上げる。問題は、この影響が北半球の中緯度付近のプレートに一番強く出ることだ。

彼は地球モデルのシミュレーションで得た通りに、地球が動き出しているのを感じた。彼は自分の読みの正確さに戦きを覚え、斉木から園部の童顔に目を移す。

日本列島では、火山噴火の同時多発が起これば、地震多発、プレート型巨大地震、そして地殻大変動へは一直線なのだ。

噴火の同時多発はマントル流動が大きく変わり出していることの証左にほかならない。もはや、人間には手が出しようがなかった。

日本列島はどうなる。人間は地殻変動が収まるまで待つほかないのか。人類は果たして生き残れるのか。

地殻大変動のなかで、人間がどのようにして生き延びるのか。ひとりも生き延びることができなければ、人類は絶滅を迎えることになるのか。もはや現代人は未来の人類へと種の糸を繋ぐことができないのか。

「噴火は北半球だけですか。それはなぜですか」
佐藤が口を挟む。

「そうだ。北半球だけで収まれば……」

一瞬、彼は微かな光を見たような気がした。だが彼はすぐ打ち消す。

そんなことはありうるはずがなかった。地球のマグマが北半球の噴火で使い果たされることは考えられない。マグマがなくなれば、マグマはすぐつくりだされるはずだ。

やがて地球全体にマントル変動の影響がおよび、南半球でも噴火が起り、地震が多発し、地殻変動へ向かうにちがいない。

彼は園部の目を覗き込む。園部は頷き、踵を返して出ていった。どんなデータを持ってくるか、彼は祈るような気持ちで園部の後姿を見送る。

「北半球だけで収まることになれば、南半球はどうなるんですか。南半球は焦熱地獄じゃないでしょうね」

佐藤は彼の思いを見透かすような目を向ける。

「日本列島の噴火はいつごろ発生するのですか。もうすぐですか。役所に早く戻らなければ……」

斉木が腰を浮かしながら、切羽詰まった表情で佐藤を促す。

「お前、ひとりて帰れ。今更慌ててみてもしようがない。これからどうなるかはここにいたほうがずっとよく分かる。俺はここで取材をつづけるからな」

斉木はしばらく腰を浮かしたままだったが、やがて腰を下ろすと、彼に問うような眼差し向ける。

「農園でも今年のデキはよくない。同時噴火で来年も日照不足がつづくだろうな。そうなれば、食糧事情はますます悪化することになる。行政はなにか対策を考えているのですか。考えているだけでは間に合わない。すぐ手を打たなければ大変なことになる……」

彼は斉木に目を向け、じっと見た。

日本列島でも方々の火山で噴火が始まるだろう。世界各地の火山帯から

噴き出す噴煙が成層圏に達し、やがて地球を覆い尽くすことになるだろう。噴煙中に含まれる極微粒子は長期にわたり成層圏に留まり、長期間日射を妨げるのだ。日照不足で農作物は育たず、さらに、低温被害を被るかもしれない。ことに、グリーンランド氷床滑落で生じた巨大低水温水塊が停滞する附近一帯では極端に気温が低下することになる。

「お前は帰って、餓死者がでないように早く手を打て。暴動が起きるぞ」
佐藤が急ぎ立てる。

「暴動？ なぜだ」

「お前は食糧が今後とも十分供給されるところにいるのか。先生の指摘の通り、日本列島では天候不順で農作物の不作は必至だ。米作もそうだ。国内の農業生産量は激減するだろう。まさか輸入すればいいと思ってるじゃないだろうな。世界的に食糧は不足している状況だ。絶対量が足りず、価格が高騰しているときに、金に糸目をつけずに食糧を買い漁る余裕はいまのわが国にはないし、必要な量を十分手に入れることはできない。とにかく、わが国において、この冬はどうにか越せても来年の端境期は危ない。いまから手を打たなければ、わが国を飢餓が襲う。何百人何千人あるいは何万人、それ以上の餓死者がでるかもしれないのだ。日本列島の火山が方々で噴火するというのに、いつまでも油を売っていいのか」

「まさか……」

斉木は一度青ざめた顔を紅潮させると、おもむろに腰を上げ、立ち上がった。

「おい、いまの音はなんだ」

「窓ガラスが……」

「割れたのか」

突然、大音響とともに、大噴火が起こった。噴煙がもくもくと立ち上り、大空へ広がっていく。いつも見なれている噴煙よりも濃い灰色で規模も大きく、広い範囲に大量の火山灰が降った。それはこれまで滅多に見られない規模だった。

市街地の降灰量は一〇センチを超え、重みに耐えかね、倒壊する家屋が相次いだ。近隣の市町村でも数センチの降灰があった。降灰範囲は隣接数県にもおよんだ。

飛行場は閉鎖され、鉄道は運休になった。道路ではいたるところで自動車が立ち往生した。広範囲にわたり、交通機関は全滅の状態だった。

交通機関だけではなかった。電気や水道もおかしくなった。大規模な停電が発生した。水道水が濁り、下水が詰まった。

空中に浮いた極微細な火山灰の粒子は人間の肺の奥まで入り込んだ。また、コンピュータなどの電子精密機器の心臓部を直撃した。ATMや自動改札機が狂いだした。交通信号機が誤作動を起し、交差点で右往左往する車で大渋滞が生じた。

都市機能が完全にマヒし、大混乱に陥った。

都市ばかりではなかった。農村部では、野菜や果樹だけでなく、農作物全般に壊滅的な被害をおよぼした。畑や水田といった農耕地だけでなく、森林地帯にも被害がおよんだ。樹木だけでなかった。そこに生息する小型

から大型の動物も被害を受けた。動物だけではない。微生物から草木にいたる生物全体に被害がおよんだ。

噴煙は止まる気配がなく、延々とつづいた。

市町村や住民は火山灰の処理に励むが、大量の降灰がつづき、追い付かない。

雨が降り出した。降り積もった火山灰が雨水に流されるまゝに濡れて重みを増す。これまで耐えていた家屋や橋梁などの建造物が耐えきれなくなつて潰れていく。

雨水が溜まり、いたところが泥沼となった。泥水が流れ出し、河へ流れ込む。河川が濁り、大量の濁水を海へ注ぎ込む。土砂流が家屋や車を流す。

こんな繰り返しが延々とつづいた。住民は口のなかを砂利つかせながら、天を仰ぐほかなかった。

23

「いつまでつづくんですかね」

佐藤は何度も同じことを繰り返す。

日本列島各地で噴火が相次ぐ。交通機関が止り、高速道路も通行止めとなつて、帰るに帰れず、佐藤は研究室に入り浸っていた。

九鬼は三度に一度、佐藤の相手をするが、椅子で目を閉じていることの方が多かった。農園に帰りたくても帰られず、ずっと研究室に閉じ籠る格好になったのだった。

彼はアキラのことが気掛かりだった。各地で噴火が相次ぐなかでアキラはどうしているだろうか。もしかしたら、農園に戻っているかもしれない。いや、なんの連絡もないのに、そんなことはありえない。火山灰の降るなかをアキラは右往左往しているのではないか。

彼は居ても立ってもおれず、外を見ようと、立ち上がって窓辺に寄る。空はどんよりとし、薄暗い。どこかの火山灰が飛んできてきているのか、窓がラスが火山灰で汚れ、ガラス越しの風景は霞がかかったようだった。

「ついでに、蔵王が噴きはじめました」
後ろから園部の声がした。

北半球にある主だった火山が相次ぎ噴火を重ね、高々と噴煙を噴き上げた。これに応呼するように、日本列島各地から噴煙が噴き上げていた。

農園も火山灰に埋もれてしまうのだろうか。殺虫剤の類や化学肥料を一切使わず、冷害にも日射不足にも強い農作物を育てていたのに、これらの作物のうえにも火山灰は容赦なく降り注いでいるのか。

葉に降り積もった火山灰が目に見えなくなった。重みにたえかねてくきが折れ、やがて降り積もる灰の底に沈んでしまう。

火山から噴き出した噴煙は周辺に膨大な量の火山灰をまき散らしながら、成層圏まで立ち上る。成層圏にたどり着いた微細な粒子の火山灰はなかなか降下せず、地球を包みこむように、成層圏全体に広がっていく。成層圏の微細な粒子は何年にもわたって留まり、地球への太陽光線の入射を遮るのだ。

彼は窓がラスを透かして空を見上げる。ふと、火山灰のペールに包まれた地球を見ているような気がした。

地球が完全に厚いペールに包まれてしまうと、地球は一体どうなるのだ

ろうか。太陽光線が遮断されれば、氷の惑星になってしまう。たとえ、太陽光線が数パーセント減少しても、地球は氷河期を迎えることになるだろう。

噴火が北半球だけなら、そのペールも全球へ広がることもなく北半球だけでおわるかもしれない。

彼は汚れた窓がラスの隙間から空を見つづけていた。いつもなら澄んだ秋の高い空が広がっているころなのに、灰色のペールを深く被った低い空だった。

24

最後まで噴火せずに残っていた富士山が激しい地震とともに、とうとう大量の火山灰を噴き出した。黒い噴煙は極端に南下している偏西風に流されて横へ広がり、灰色の噴煙は黒い噴煙のなかをするとハイスピードで上空へ舞い上っていった。

噴煙はつぎつぎと押し上げるようにもくもくと噴き出し、一目散に天空を指す。瞬く間に、成層圏に達した噴煙は次第に横へ広がり出していった。

火口からマグマが噴き出す。火口は大きく口を開き、口から溶岩が溢れ出し、山腹を流れ落ちる。時折爆発を起こし、溶岩を空高く飛び散らす。流れ出した大量の溶岩が幾条もの河となった。溶岩の河が樹木を焼き尽くし、ホテルや人家を呑み込んでいく。

溶岩の河は麓の樹海を焼き付くし、野を越え、畑を越えて市街地まで達

した。それでも流れは衰えることはなかった。

噴煙はますます激しく吐き出され、大空一杯広がっていく。灰色の噴煙は垂直に立ち上り、黒い噴煙は横に広がり、山容を覆い尽くす。

何度も爆発を繰り返した。そのたびに噴煙が広がった。爆発のたびに大量の火山弾が飛び散る。火山灰がジェット気流である偏西風に乗って広がり、広範囲に大量の火山灰が降り注ぐ。

富士山の火山灰は関東平野一帯に大量に降り注ぐはずだった。だが関東平野はすでになく、被害をおそれていた大都市東京も姿を消し、そこにはいま広大な海原が広がっているだけだった。

海中へ沈没してしまった関東平野への火山灰の心配はなくなっていたものの、成層圏へ高く上った極微粒子は天空一杯に火山灰のペールを広げ、今後何年にもわたって地球への日射を妨げ、全世界に影響をおよぼしつづけるのだ。

噴火はつづく。噴火のたびに富士山は大きく姿を変えていく。噴煙のなかに山頂を飛ばし変容した富士山の姿がうつすらと垣間見える。そこにはすでにかつての端麗な富士の姿はなかった。天高く聳えた孤高の勇壮なかつての富士の面影は噴火とともに消えてしまったのか。

25

「あれ……」

ソファで火山噴火の中継を見ていた佐藤が思わず甲高い声を上げ、テレビの画面を指差した。

テレビは各地の火山噴火の様子の中継していた。噴煙でヘリコプター取材ができず、もっぱらローカル局の足で稼いだ映像が中心だった。

富士山の噴火で日本列島における火山噴火が一段落し、やがて終息していくものと思われた。だが日本列島の岩盤の奥にはまだまだマグマが残っているのか、それともマグマがつつぎつつぎと送り込まれるのか、ここにきてふたたび日本列島では噴火が相次いでいたのだ。

奇妙なことに、過去に噴火歴のないものや、噴火のあったことさえすっかり忘れかけていた山々がつつぎつつぎと目を覚まし、噴煙を吐き出すのだ。温泉の源泉地帯や蒸気を噴き出す地獄谷といった地帯のいるところで異変が起きた。小さな爆発を繰り返し、水が温水に変わり、火炎を噴き出したのだ。割れ目からどろどろの溶岩を覗かせたり、もくもくと黒煙を噴き出したりした。ときには大きな水蒸気爆発を引き起す。

こんな様子をテレビは一日中延々と流していた。彼は指先でテレビを差したまま振り向き九鬼の姿を探したが、席にいなかった。

一瞬、彼はかつて九鬼が籍を置いた東京の大学の研究室にいるような気がした。しばらく、誰もいない研究室で、彼はそんな錯覚を楽しんでいた。

数年まえのことだった。九鬼が佐々木教授に呼ばれて、大学に戻ったばかりだった。彼は九鬼が妻を亡くしたばかりであることも、赤ん坊のひとり息子がいることも知らなかった。なにもやる気がないような九鬼が机でぼんやりしている研究室に入り浸り、なにか思い付いては議論を吹っつけた。

「佐藤さん、九鬼先生は……」

いつの間にか、園部が後ろに立っている。

「なんだ、きみか……」

彼は驚きの声を上げる。

「……どこかな……、すぐ、戻ってくるんじゃないの。どうかしたの……」

「フィリピン海プレートが……」

「え？ いよいよお出でなさったか」

彼はふと、九鬼がまえに火山噴火が一段落して終息へ向かうと、つぎは巨大地震や地殻変動が本格化するだろうと言っていたことを思い出し、園部をじっと見る。童顔が紅潮している。

突然、彼の脳裏に見ていたテレビの画面が浮かんた。恐怖に怯えた男の子の顔が大写しになった。あるとき、ひとりでに声が出た。どこか見覚えのある顔立ちだった。知り合いの子のような気がしたのだ。

「多分、火山噴火のつぎは地震ではないかと思つて……、先生に……」

彼は園部の顔を見ながら、必死に記憶を辿る。

九鬼のひとり息子のアキラだったのだろうか。だが彼はアキラと一度も会ったことがなかった。それにあの大写しの男の子は中学生ぐらいの年頃だった。アキラくんは小学校の一年生だったはずだ。一体誰だろうか。

あの少年は一人ぼっちだったのだろうか。彼はアキラと重ね合わせていた。アキラが探していた祖母はすでに亡く、育ての親であった叔父夫婦の行方が分からないままだった。アキラは実の父親が探していることも知らずに、祖母の面影を求めて彷徨いつづけているのか。幼いアキラは祖母が急に姿を消したことをどう感じているだろうか。

「あ、先生……」

園部が戻ってきた九鬼に気付いて、声を上げた。

「フィリピン海プレートが動きだしたようです」

「そうか……」

九鬼はちらりと彼に視線を向ける。彼は研究室に入り浸ったまま、本社に情報を流し、記事の原稿を送っていた。九鬼の視線は記事にしろというサインだった。だが彼は全然気付かず、ソファに背を押し付けもたれたまままだ。

「これが駿河湾海底のデータですが……」

「ふーむ。近々ですね。かなり迫っている感じだね」

九鬼はもう一度彼に目を向けた。だが彼は気付かない。

「佐藤くん、大地震が来るぞ」

「え？ ホントですか。いつですか。どこですか」

彼は矢継ぎ早に言葉を発したものの、九鬼をじっと見たまま動こうとしなかった。いや、なぜか、身体が動かないのだ。

大写しの少年の顔が迫ってくる。

「先生、アキラくんはどこにいますか。大丈夫でしょうか」

彼は九鬼にテレビ中継で見たどこか見覚えのある少年の話をした。アキラくんも噴火に追われ、火山灰が降りしきるなかを恐怖に戦きながら、逃げ惑っているにちがいない。今度は地震だ。

九鬼は黙ったまま、身を翻し、窓辺に立った。その後姿に寂寥感が漂い、いまにも消え入りそうに感じられた。突然、微かに背が震えた。

彼は見覚えがありながら、どうしても思い出せない少年の顔をもう一度思い浮かべる。確かに、一度どこかで会ったことがある。それでも思い出せない。自分でもどかしかった。もどかしい自分をもてあまし、少年を忘れてしまいたかった。

そのときふと、彼は自分のひとり息子であるアキラを探そうとしなくて

いる九鬼を知らず知らずに非難の目で見ていたことに気付いた。苦しんで
いることに気付かず、九鬼に「アキラくんはどこにいるのか」と言っ
てしまった自分を悔いた。

よちよち歩きの幼児のときにわが子と別れた九鬼は成長したアキラがど
んな顔をしているか知らない。それはテレビの少年の顔に見覚えがありな
がら、どうしても思い出せないでいる自分と同じことではないか。九鬼は
わが子を探し出したたくても、わが子を探し出すことができないのだ。わが
子のように見えても、わが子かどうか確かめることができないのだ。九鬼
の思いを考えると、彼は全くやりきれなかった。

「地震が発生したようです」
園部が声をあげる。

「どこ……」

暗い顔の九鬼が窓辺からゆっくり戻ってきた。

応接セット横においてあるテレビに地震のテロップが流されている。三
人は息を呑んで、じっとテレビの画面を見入る。

「午前十一時三十三分頃、東海地方にマグネチュード八の地震がありまし
た。震源は駿河湾の様様」

テレビは地震直後の映像を流しながら、アナウンサーが何度も同じことを
繰り返して、巨大地震発生を報じていた。

しばらくして、三人が一斉に口を開く。

「震源は駿河湾（東南海トラフ）か……」

「マグネチュード八……」

「大津波が来る……」

三人はそれぞれ思いの言葉を発したものの、目はテレビに張り付いたま

まだだった。

26

東海地方で余震がつづく。マグネチュード七を超えるものもあった。そ
の都度、大小の津波が押し寄せる。だが海面急上昇によってできた新しい
海岸線にはなんの備えもなかった。

津波は海面急上昇で海中に取残され、辛うじて海面に頭だけを出してい
る大小のビルやマンション、橋梁やタワーなどの臨海都市の残骸をなぎ倒
して押し寄せ、内陸部へ奥深く流れ込む。

津波は海面急上昇で水没した地点で、水深が浅くなるのか、急激に波高
を増幅して新海岸に襲いかかる。地震で倒壊した建物の残骸が津波に洗わ
れ、押し流されていく。本震に耐え、余震にも耐えた建造物に津波が襲い
かかり、止めを刺した。

東海地方の巨大地震に呼び覚まされたのか、これを契機に、日本列島の
いたるところで身体に感じる微震動が激しさを加える。まるで日本列島が
マントル変動に震え戦慄き、震えが止まらないかのようにだった。

東海地方を襲った巨大地震は、一度の地震動で終わらなかった。

余震がなかなか収束しないのだ。地震動が徐々に鎮まっていかず、何度
も繰り返す余震のなかに、時折、本震を超えるような地震動が混った。

なぜそんな現象が生じるのか、見当がつかなかった。だがそれは新しい
地震だったのだ。震源が近接していたために、余震だと勘違いしていたに
すぎなかった。

つづいて、西南海トラフを震源とする東南海地方に方巨大地震が起きた。なか二日置いて、南海地方で巨大地震がつづいて発生した。

地球の表面を一〇数個のプレート（地殻岩盤）が覆っているが、大別して、地震にはプレートとプレートの境界で起こるプレート境界型とプレート内で起こる内陸型とがある。前者はプレート間の歪みが原因の地震であり、後者は地層のずれ（断層）が原因となるものである。

今回の地震は前者のプレート境界型であった。プレート間に溜まった歪みが開放されて生じた地震だったが、歪みを開放させるひとつの要因が地球温暖化の果てに発生した地球自転速度の変動から誘発されたマントル変動だった。それゆえに、一回だけの地震でプレート間の歪みが解消するといった単純なものではなかったのである。

日本列島の太平洋側には世界有数の海溝が広がっており、複数のプレートが出会うところでもある。今回の巨大地震の震源となった駿河湾海底は、四方八方から迫るプレートが出会う場所であった。その主だったものは、東北からはオホーツクプレート（北米プレート）、東からは太平洋プレート、南からはフィリピン海プレート、西北からユーラシアプレートといったプレートで、これらは日本列島の下で鬩ぎ合い、複雑な地殻地層三次元構造をつくりだしているのだ。

フィリピン海プレートが迫る西南日本の太平洋岸には駿河湾奥から東南海、西南海へと連なる南海トラフが形成されている。トラフは海溝が浅くなったところだが、ここから日本列島の下へ潜り込んだフィリピン海プレートの下へ日本列島の太平洋岸に迫る巨大な太平洋プレートが潜り込む。この付近ではプレートが二層三層に重なりあっているのだ。

無理やり潜り込もうとするプレート相互間の押し合いからプレート境界

に歪みが生じることになるが、複雑な地層構造のために歪みや歪みの発生箇所もさまざまで、日本列島付近ではプレートの歪みが水平方向のみならず、垂直方向にも何箇所にもわたって生じているのだ。これらの歪みにプレートがこらえ切れなくなったときに周辺が破壊されて地震が発生するのだが、今回はこれに新たに生じたマントル変動が地殻を揺り動かす誘因となって加わっているらしい。

ということは、限界まで待たずに歪みがマントル変動の影響で開放されてしまうということだ。要は、マントル変動によって、プレート境界ではプレート型地震がまえに増して頻発するということである。

駿河トラフを震源とする東海地震の余震がつづくなかで、新たに南海トラフを震源とする南海地震が発生した。立て続ぎに、西南海トラフを震源とする南海地震が起きた。ともに、マグネチュード八を超える巨大地震だった。

大津波が襲った。津波は余震の度に発生し、海面急上昇で水没した旧市街を乗り越え、内陸奥地まで呑み込んでいった。

西日本において地震動がつづいた。立て続けに発生した巨大地震の余震か、それともそれに触発された新たな地震なのか分からなかった。大小の地震が乱発、群発を繰り返すのだ。それはまるで制御機構を欠いた原子炉のようなものであった。

いたるところに地割れが生じ、亀裂の底から蒸気を噴きだした。白煙や黒煙を空高く噴き上げるものもあった。なかには真っ赤な長い舌を出し、マグマのよだれを流しているところもあった。

日本列島各地で火山の噴火はまだつづいていた。日本列島の太平洋岸、ことに西日本の太平洋岸では巨大地震の余震がつづき、それに触発されて

内陸部においても大小の地震が群発していた。

日本列島は、地球温暖化の果てに、関東平野（首都圏）の分離喪失（沈没）につづき、全世界を襲った海面急上昇ですっかりやせ細り、かつての面影をすっかり失ってしまった。そんな日本列島のいたるところで火山が噴火し出し、噴煙を噴き上げる。

やせ細ったとはいえ、地球の火山帯に位置する日本列島には北の端から南の端まで火山が連なっている。火山が噴きだす火山灰は日本列島全土を覆い尽くすように降り注ぐのだ。そんななかで、日本列島全土を揺るがす地震動がはじまり、西日本一帯で巨大地震が発生したのだった。

最後の足掻きのように、日本列島全体が大きく打ち震えた。だがこれで終わらなかった。

27

「先生、これで一段落でしょう。現場へ行ってみたいのですが……」

佐藤は先刻から研究室のなかを行ったり来たりしている九鬼に声をかける。

「……………」

彼は振り向き、佐藤を一瞥する。彼には佐藤がなにを言いたいのかわよく分かっていて、だが無視して口を開こうとしない。

「先生、簡単なモデルで計算してみたのですが……」

園部がコピーを片手にあたふたと駆け込んできた。

「ああ……………」

彼はコピーを受け取ると、腰を下ろしながらテーブルにデータシートを広げた。

「やはり、プレートには不均等な力が作用しているようで、それも一部でかなり増幅しているようなのです……」

園部が傍らでデータを覗き込みながら、分析結果を披露する。

「なんですか、これは……」

佐藤も身を乗り出し、口を挟む。

「佐藤くん、首都圏島沈没のつづきが起こるかもしれない」

「え、なんですって……。冗談じゃない、これ以上日本の領土が小さくなったらどうなるんだ……」

「付近の住民に危険を知らせる方法はないかね。なんとか、今日の夕刊にはもう間に合わないか……」

彼は佐藤に促す。

「どこでいつだ……」

「こんどは大規模な地殻変動だろう。近々、日本列島を縦断する中央構造線附近が動き出すかもしれない。両側数キロの範囲が危険地帯かな。それと日本列島を横断する構造線近辺が危ない」

中央構造線は西南日本を関東から九州へ縦断する大断層系だ。中央構造線の北側（内帯）と南側（外帯）では構成する岩石の成因を異にする。これが日本列島最長の構造線であるが、このほか、日本列島を横断する構造線が数本ある。日本列島本州の中央部に中央地溝帯があるが、その両側には構造線が走っている。糸魚川静岡構造線（西端）や新発田小出構造線（東端）だ。その外側には敦賀湾伊勢湾構造線などが走っているし、中にも柏崎千葉構造線が走る。

「で、どうなるのですか」

「隆起するか、離れるか、分からないが、とにかく動き出すだろう。地震のような激しい動きではないと思うがどうか……」

彼は中央構造線附近では北側の内帯部分が一部隆起しながら大陸へ引張られ、南側の外帯がそのまま沈降していくのではないかと考えていた。だがこれらの現象は一部では突発的な現象として現れることもあるが、全体的には数か月から数年、あるいはさらに長年月を要するかもしれず、彼はあえて指摘することはしなかったのだ。

「どう警告すればいいのかな。中央構造線附近と言っても広範囲過ぎるし……。一体、どんなことが起こるんですか」

佐藤は彼の目を覗く。

「はじめは地割れかな。深いクラックができて、次第に幅を広げていく。首都圏島のときと同じと思ってい。とにかく、土砂崩れや川の水の濁りなどに注意することだ。園部くん、そのほかにあるかな」

彼は先刻から隣でしきりに頭をひねっている園部に声をかける。

「え……、まあ、そうですね……」

園部は口ごもり、言葉がつかつかない。九鬼を振り返り、しきりに頷きかえす。

「で、中央構造線のほかには……」

佐藤は漸く自分が記者であることを思い出したらしかった。

「中央地溝帯は沈下する可能性があるが、これも多分、全体的には緩慢な動きとなるだろう」

「全体的にですか。ということは、部分的には激しい破壊現象が生ずる可能性もあるということですか……」

「それはありうるだろう」

「たとえば、諏訪湖が陥没するとか……」

佐藤はなにかを嗅ぎ取っているらしい。だが彼は素知らぬ振りを装った。

彼は中央地溝帯は日本列島の本州中央部を幅一〇〇キロほどの帯状に横断するが、その東端と西端に構造線が走る。いいかえれば、日本列島本州中央部を横断する二本の構造線の間には挟まれた地帯が中央地溝帯だった。その西側を走るのが糸魚川静岡構造線で、その周辺には浅間山や富士山など火山が連なる。さらに、その西の方には敦賀湾伊勢湾構造線が横断している。この構造線は敦賀湾から日本列島最大の湖琵琶湖の縁を抜け、伊勢湾に入るのだ。

彼はこの西側にある構造線が気になっていた。西南日本を縦断する中央構造線はこれらの構造線を横切る。紀伊水道から紀伊半島へ向かう中央構造線は敦賀湾伊勢湾構造線と交わり中央地溝帯へ入る。日本列島の中央部に構造線がことのほか複雑に入り込んでいるのだ。

ここで起こるであろうことを想像した途端、全身に戦慄が走った。彼は気付かれないようにひとり静かに息を呑んだ。

28

西南日本を襲った巨大地震の余震はつづいていたが、次第に弱まり、収束へ向かいつつあった。だが日本列島の火山群は相変らず思い出したように噴火を繰り返し、黒煙を噴き、火山灰を撒き散らし、未だ収束する気配はなかった。なかにはいまだに火口からマグマの赤い舌を覗かせていると

ころもあった。

日本列島の地下深いところで、マントルが妙な動きをはじめていた。そして次第に力を増していく。

日本列島全体を大きく揺るような超長周期の微震動が日増しに強くなっていた。時折、地底から突き上げるような衝撃が走る。そのたびに、九鬼はやがて日本列島がばらばらになるのではないかと思う。本州は数個に分割され、北海道は三つ、九州と四国はそれぞれ二つに分かれてしまうのだ。

北極海から海水が姿を消し、グリーンランド氷床の氷が消えて、北極の自転軸に微妙なバランスの崩れが生じたのか、北極側に揺らぎが生じた。これがとくに中緯度附近のマントルの動きに影響をおよぼし、ここに位置する日本列島が強く影響を受けているらしい。

日本列島だけではなかった。北半球の中緯度に位置する世界の各地域で同様の現象が頻繁に起きていた。そのなかでも、とくに敏感に反応していたのが日本列島だった。

「どう。変化はないかな……」

彼は園部を振り返る。

園部は各地から大学の研究センターに送られるデータの解析に余念がなかった。

「どこもかしこもおかしなことばかりです。地中では考えられないようなことが起きているようです。突発的な震動が不規則に起きているのですが、これは……」

ディスプレイから顔をあげた園部の目が血走っている。

「四国からのデータはありませんか」

彼は中央構造線が走る中部地方と近畿地方が気になっていた。いや、大

阪を中心とする関西圏と名古屋を中心とする中部圏が首都圏の二の舞いになるのではないかと恐れていたのだ。

関西圏と中部圏ともに、海面急上昇でゼロメートル地帯が水没し、超高層ビル群は中海上都市となっていたし、西日本巨大地震でさらに被害を重ね、圏内の大小の都市は満身創痍の状態にあった。だが首都圏が沈没してしまったいまでは、関西圏中部圏両圏とも日本にとって欠くべからざるものなのだ。

海面急上昇の混乱のなかで、地殻変動でもし関西圏と中部圏が沈下し、海中へ沈没するようなことになれば、日本は富の八〇パーセントを失うばかりではなく、社会がますます混乱し、日本が再起することは完全に不可能となるであろう。それよりも日本国そのものの存立さえ危ぶまれることになるにちがいない。

関西圏や中部圏に地殻変動の兆候が出ていないだろうか。いや、すでにその兆候が出ているのではないか。

だが海面急上昇によって都市部の大半を水没してしまったいま、その兆候を目にすることができなかつたのだ。彼は気が気でなかつた。そして思いついたのが四国を縦断する中央構造線の状況からこれを推測することだった。

「四国ですか……」

園部は怪訝な顔で聞き返す。

「そう。四国の山奥で土砂崩れが起きてませんか。吉野川はどうですか、濁ってきていませんか」

「多少濁っているようですが、上流で降った大雨の影響ではないかと言ってますがよく分かりません……」

彼は園部の報告を聞きながら、四国から紀伊半島、伊勢湾へと延びる中央構造線を思い浮かべ、淡路島南端の海底深くで中央構造線が動き出しているのではないかと思っただ。

29

西南日本を襲った巨大地震の長引く余震のなかで、地球は日本列島に対してつぎのステージを準備していた。日本列島を襲った巨大地震は日本列島の地殻変動の前触れに過ぎなかった。中央構造線が西南日本巨大地震の余震に連動するような形で動き出していたのだ。

その兆候はまず四国で現れた。

四国の北側を縦断する中央構造線の北側の一部に僅かな隆起が見られ、南側の一部に沈下の兆候が発見された。日を追うごとに、次第に顕著になっていく。四国での中央構造線周辺における異常現象の発生は関西圏での中央構造線周辺の異常発生を予想させるものだったのだ。

海面急上昇後、ゼロメートル地帯はもちろん、低地帯の商業地や住宅地が水没して幾分人口が減少したとはいえ、関西圏が人口稠密地帯であることには変わりなかった。首都圏が喪失して以来、日本第一の都市圏となっていた。もしここで大災害が発生すれば、大惨事になることは必至であった。

大阪湾を走る中央構造線は淡路島南端で二つに分かれ、一方が有馬高槻構造線となって日本最大の湖である琵琶湖の西側を抜け、敦賀湾伊勢湾構造線は向かう。そのまま進んだもう一方のほうの中央構造線は日本列島を

横断する構造線と交差を繰り返しながらさらに東へ走るが、途中いくつもの断層線と交差する。

琵琶湖は五〇〇万年から六〇〇万年まえに地殻変動でできた構造湖である。日本列島最大の淡水湖で、魚類など多様な水生生物が棲息しており、漁業も盛んに行われている。面積は約六七〇平方キロメートル、最大水深は約一〇三メートル、貯水量は約二八立方キロメートルあって、関西圏の水がめとなっている。水面の標高が約八四メートルあって、南端の水門から流れ出た湖水は瀬田川、宇治川、淀川と名を変えて流れ、大阪湾へ注ぐ。琵琶湖周辺には構造線や大きな断層が走っている。もし、琵琶湖周辺で地殻変動が起きたらどうなるか。これが彼が心配していたことだった。

「先生、糸魚川静岡構造線が動き出しているようです」

園部が不意に声を張り上げた。顔を紅潮させて、振り向く。

「え？ 糸魚川……」

彼は全然予想していないことではなかったが、先のことだと思っていたのだ。

「諏訪湖が……」

諏訪湖の規模（貯水量）は琵琶湖の数十分の一だが、同じ構造湖で、断層活動によって引き裂かれてできた湖だった。ふたたび断層が動けばどうなるのか。湖底が隆起して湖水が一拳に溢れ出るのか。それとも裂け目が広がり、湖水が一瞬のうちに呑み込まれてしまうのか。

「諏訪湖がどうしたのだ」

彼はおもむろに尋ねる。

「まだ分かりませんが、糸魚川静岡構造線が一部で離れ、一部で押し合っているようです。データからは日本海寄りでは張力が働き、内陸中央部で

は圧力が加わって地殻が圧縮していると考えられますが……」

「すると、諏訪湖の湖水が溢れ出るようになるかもしれない……。佐藤くん、佐藤くんはいないか」

佐藤の姿が見当たらない。

「園部くん、佐藤くんは……」

「いままでそこにいましたが……」

そのとき、佐藤が携帯電話を片手にドアから顔を出した。

「佐藤くん、どこにいたんだ」

「廊下で社へ電話を……」

佐藤はきよとんとして、彼の顔を見上げている。

「早く、警報を……」

彼は手短かに諏訪湖が危険な状況にあることを説明した。

「発生するのはいつですか」

「園部くん、どうですか」

「いまの状態では近々だと思いますが……」

「一両日中に諏訪湖の湖水が溢れ出す恐れがある。流域には鉄砲水が襲う

かもしれない。佐藤くん、どうすればいいんだ」

一刻も早く周辺市町村の住民へ危険を知らせたい。だが彼はどうしてい

いのか分からないのだ。

一瞬、彼の脳裏に琵琶湖の全景が浮かんだ。突然、琵琶湖大橋が崩れ落

ち、近江大橋が崩れ落ちていく。

「ああ、琵琶湖が危ない。佐藤くん、琵琶湖も危険だ」

「琵琶湖ですか」

佐藤は携帯で連絡を取り始める。

「先生、琵琶湖ですか……」

彼は大きく頷く。

背後に呆気にとられた園部の顔があった。

30

突然、諏訪湖の中央で湖水が濁り出した。瞬く間に濁りが湖面を南北の方向へ一直線に走る。諏訪湖のそばの丸山が山頂附近で砂塵を舞い上げた。つぎの瞬間、砂煙りを挙げて山肌が深層から崩れ落ちる。

濁水が溢れた。溢れ出した濁水が諏訪市街を水浸しにした。水門を乗り越えた濁水は天竜川を駆け抜ける。水量が急激に増し、激流となって川底や沿岸の岩肌を削り、堤防を打ち壊す。砂利や小石、大きな石や岩を巻き上げる。土砂を大量に含んだ重い濁水は時速五〇キロを超える急流となって流れ過ぎていく。濁水の激流のなかで拳大の小石がぶかぶかと浮かび、大岩がゴロゴロと音をたてた。土砂を大量に含んで浮力を益した濁水はあらゆるものを持ち上げ、押し流していく。

濁水は途中の橋梁を流し、ダムを決壊させてさらに水高を益し、巨大な鉄砲水となってすべてを破壊していった。障害物は粉々に打ち砕かれ、濁水とともに天竜川を下っていく。川幅一杯に広がった濁水は岸の堤防を壊す。低地に溢れ出た濁水は洪水となって広がり、集落や市街地を呑み込んでいった。

天竜川で釣りをしていた男が流された。河原でバーベキューを楽しんでいた家族連れや会社仲間たちがつきつきに呑み込まれ、流されていった。

遠州灘へ注ぎ込むまで、濁水は暴れ回った。海面急上昇ですっかり水はけが悪くなった河口付近には濁水が運んできた大量の土砂や大小の石、家

屋の残骸や根刮ぎの樹木、それにさまざまなゴミがうず高く積もり、さらに、排水を妨げる。大量の土砂の山に勢いを殺がれた濁水が堤防から溢れ出て一面に広がり、洪水となって市街地を襲う。海面急上昇で沿岸低地の住宅地帯や工業地帯はおかたすでに水没していたものの、高台に僅かに旧市街地が決定的なダメージを被った。

諏訪湖からの溢水ではじまり、水門決壊でピークに達した狂暴な鉄砲水は数日つづいた。だがこれで終わりではなかった。

諏訪湖のある糸魚川静岡構造線と交差する中央構造線が動き出していた。構造線を横断する高速自動車道の橋桁を支えるコンクリート柱にヒビが見つかったのだ。

正確な観測の結果、中央構造線の外帯（南側）が、ところによって、日に一、二センチメートル程度の速度で沈下していることが判明した。逆に、反対の内帯（北側）が僅かに隆起し出しているらしい。

それだけではなかった。

諏訪湖の水門を決壊させ、湖水を溢れ出させた糸魚川静岡構造線の異常な動きは、その東側に広がる中央地溝帯の地殻変動の端緒に過ぎなかった。

諏訪湖の鉄砲水騒ぎにつづいて、中央地溝帯全体が沈下し出したのだ。

さらに、日本列島を横断する何本かの構造線も動き出していた。

ことに、琵琶湖の周辺の構造線が奇妙な動きをはじめた。琵琶湖の周辺には西側から北側を回るように走る有馬高槻構造線と琵琶湖の北東側を通る敦賀伊勢構造線があり、南には中央構造線が走っている。これらの構造線が軋み出していた。中央構造線の動きのほかに、有馬高槻構造線と敦賀

伊勢構造線の一部に数キロにわたるクラックや巨大な窪みが見つかったのだ。

微震動がつづき、クラックから四方八方に亀裂が走り、次第に幅を広げていく。日本列島が東西の方向へ伸びているのか。

突然、琵琶湖の水位が下がり出した。南端の水門からの流出水量が減り出したのだ。

なぜ、水位が低下するのか、分からなかった。大量の湖水がどこへいったのか。水位低下の原因が掴めないまま、水位の低下がつづいた。

しばらくすると、奇妙なことに、水位は上がり出した。

有馬高槻構造線のクラックから水がしみ出した。敦賀伊勢構造線のクラックでも同様の現象が見つかった。近畿、中部圏を走る中央構造線からも水がしみ出している箇所が見つかった。

最初はしみ出している水が琵琶湖の湖水だと誰も思わなかった。

クラックからの湧水が次第に増え、水高を増していった。誰もがうすうす琵琶湖からの漏水じゃないかと感じたころには、もはや、手をつけられない事態に陥っていた。

琵琶湖の湖底に走っている断層が上下に僅かに動いていたらしい。その隙間から漏水がはじまったのだ。

漏水は瞬く間に水路を広げていった。地中の水路は琵琶湖周辺の構造線と連結して広がっていった。次第に大きくなって、大水路となっていく。

大水路から地上に溢れ出た大量の水は大洪水となって辺りを呑み込み、広がった。

琵琶湖の大量の湖水は、やがて、大阪圏、中部圏へ向かい、海面急上昇のとき水没を免れた一帯をひと呑みしていった。

第四章

31

「先生、これから本社へ戻ります。どうやら、噴火も鎮まり、高速も通行止めが解除なつたようですから。ついでに、途中、方々に立ち寄って、被害状況を取材するつもりですが……」

佐藤は研究室に泊まり込み、目まぐるしく過ごした日々を思い返しながら、九鬼の顔をじっと見た。夏の終わりにはじまった火山の同時噴火がつづくなかで、巨大地震、地殻変動と立て続けに起きた異変もようやく収まりを見せていたのだった。

「そうか。帰るか……」

九鬼はあらぬ方を見たまま、低い声で呟くように言う。

「ええ……」

彼は短く応え、九鬼を見つづける。その横顔には同時噴火、巨大地震、地殻変動と立て続けに日本列島を襲った天変地異の最中、アキラの安否を思い居ても立つてもおれずにいながら、どうしていいのか分からず、じつと耐えていた苦悩が刻まれていた。

彼には九鬼の気持ちが痛いほど分かる。地殻変動はまだつづいていたが、ここでの取材活動は一端中止して本社に戻ることにして、実は、途中、行き先々で、九鬼と一緒に時間をかけてアキラを探したかったのだ。だが彼はじつと歯を食いしばっている九鬼にどう言えばいいのか迷った。

九鬼は椅子から立ち上がると、窓辺に寄って外に目をやった。

「今年は凶作だな……」

九鬼の細い声が響く。その声にはどこいいるか分からないわが子アキラへの思いがあった。

「先生、アキラくんを探しに行かなくてもいいのですか。噴火も収まり、地殻変動も一段落したので、ここにいらなくてもいいんじゃないですか。ぼくにひとつ心当たりがあるんです。本社に戻る途中、そこを訪ねようかと思っているんですよ。一緒に出掛けませんか。アキラくんがひとり寂しくひもじい思いをしているかもしれない。早く、探して上げなくちゃ……」

彼は堪り兼ねて曇り掛けるように言う。じつと彼を見つめる九鬼の目が微かに潤んでいた。

32

世界各地で発生した火山の同時噴火はようやく収まったものの、海面急上昇でやせ細った陸地に厄介ものを残していった。火山周辺や風下地域に溶岩や火山灰を撒き散らし、植物が育たない酸性土壌を大量に置き去りにしたのだ。

また、成層圏に舞い上がった極微粒子の火山灰が北半球の中緯度から高緯度にかけて広がり、太陽光線の入射を妨げ出した。これらの成層圏の火山灰も時を追い拡散し、いずれ地球全体を火山灰の傘で覆うことになるだろう。

火山灰の降灰被害を免かれた地方でも、火山灰の傘による日照不足を避けることはできない。多くの国々で、穀物や野菜など収量が軒並み落ち込

み出したが、やがて全世界で農作物の収量減少が起こることだろう。

すでに逼迫し出していった世界の食糧事情が火山灰の傘でさらに進むことは間違いなかった。食糧不足を見越して、食料価格が急騰し出した。

日本列島では、首都圏の沈没と大津波による大規模被害、それに海面急上昇とつづき、関東平野と列島沿岸部がそぎ落とされて急激にやせ細り、日本列島は姿を一変させてしまっていた。そこへ火山同時噴火が発生し、次いで、日本列島の西半分を巨大地震、そして地殻変動が襲ったのだ。

日本列島は海面急上昇で姿を変えただけではなかった。海に呑み込まれていった太平洋沿岸低地には大都市や大規模な工業地帯がベルト状に連なり、人口のみならず、富の集積地帯でもあった。海面急上昇はまた、交通や物資の輸送に欠かせない拠点である港湾を奪った。さらに、大規模な沿岸漁業は言うに及ばず、生業の小規模漁業にも壊滅的打撃を与えたのだ。低地に広がる肥沃な農耕地も水没していった。

これに火山同時噴火、巨大地震、そして地殻変動が相次ぎ、日本は一瞬にして、領土の数パーセントと富の大半を失った。人口の半数が住処と職と財産を奪われ、難民と化したのだ。

何千万人におよぶ大量の難民が住処を探しあぐね、日本各地で右往左往し、日本国中を彷徨っていた。あまりの多さにかなる対策も焼け石に水の状態だった。国も地方自治体も手も足も出ない有様であった。

難民はさらに増えつつあった。同時噴火の被害や被害者数も、西日本を襲った巨大地震と巨大津波、つづく地殻変動の被害や被害者数も、いまだに正確に把握できずにいたのだ。

だがこれは日本だけではなかった。

海面急上昇は世界の国々をも襲った。沿岸諸国だけではなく、それ以外

の諸国にもこのほか重大な被害をおよぼす。

世界には、日本と違い、国々をまたがり、低地をゆつたりと流れる大河が多い。これらの勾配の少ない河川では、海面急上昇によって海水が河川を上り、内陸奥地に洪水や塩害をもたらす。洪水が引かず、市街地や農耕地が広範わたり湿地地帯となった。

海面急上昇の二次被害は世界各地にじわじわと広がり出していたのだ。

西ヨーロッパではライン河やドナウ河などが氾濫し、沿岸諸国は大洪水に見舞われていた。東南アジア諸国を貫流するメコン河や南米のアマゾン河などの広大な河口は海に呑まれ、多くに人びとの生活のよりどころだったデルタ地帯は水中に没した。内陸部の上流にも海水が溢れ、広大な湖や湿地帯が出現していた。

こうして、デルタ地帯に広がる肥沃な農耕地は失われ、さらに、気候変動により内陸の農耕地にも干害や塩害、あるいは日照不足や長雨、強風や豪雨による表層土壌の流失被害が続出して、世界の農作物の生産量が落ち込んでいった。そこへ世界各地で火山噴火や地震が発生したのだ。

一方、食糧不足とともに水資源の不足が深刻化していた。気候変動によって世界の降雨量が大幅に変化した。これがまた生活や農業生産に影響をおよぼすのだ。

いままで湿润な気候だったところが乾燥し、逆に、乾燥地帯に大雨が振るのだ。排水施設がいらなかったところの大雨は大洪水となった。病原菌やウイルスを媒介する蚊やねずみが大量に発生した。公衆衛生も著しく低下し、感染症の温床になった。

世界各地で食糧不足や水不足によって大量の難民が発生したが、これらの難民は食べものや飲み水を求めて国境を越えて彷徨い出していた。

日本列島も例外ではなかった。日本でも各地で食べものを求めて彷徨う難民が続出した。ことに、北日本と東日本ではグリーンランド氷床融解から生じた巨大冷水塊がオホーツク海から三陸沖にかけて居座りつづけている影響をまともに受け、近年にない酷い冷害に見舞われた。夏季に気温が上がり、農作物にとつて必要な気温に達することがなかったのだ。

ヨーロッパで何ごともなかったような穏やかな日が三日ほどつづいた。そのあと、突然、西ヨーロッパに大寒波が襲った。

まだ九月だというのに、各地で氷点下を記録した。収穫期だった農作物や果実類は軒並み大被害を被った。

グリーンランド氷床の大滑落が熱塩大循環に影響をおよぼし、大量の熱をもって北大西洋へ北上する暖流の勢力が弱まり出し、ヨーロッパ大陸への熱の供給が半減していたのだ。

これが合図となって、海面急上昇で住処を追われ、仮住まいを余儀なくされていた大量の環境難民が大挙して動き出した。高速道路や主要道路に車が溢れた。夏の間、北に留まって熱波の収まる頃合いを窺っていた連中もこれに加わり、南へ向けて大移動を始めたのだ。

ヨーロッパではじまった環境難民の大移動は、瞬く間のうちに世界中へ広がっていった。

33

「心当たりがあると言っていたが……」

高速自動車道に乗り入れると、助手席の九鬼がまえを見たまま、低い声

でぼつりと言った。

聞こえたのか、聞こえないのか、佐藤は黙ったまま、ハンドルを握っている。車が徐々にスピードを上げていく。

彼は佐藤を一瞥したきり、何ごともなかったようにフロントガラスを見つめていた。不意に、フロントガラスにアキラが映った。よちよち歩きのアキラが笑っている。

彼はしばらくアキラの面影を追っていたが、アキラが小学校の一年生であることを思い出し、頭を激しく左右に振った。

彼の記憶にはよちよち歩きのアキラしかないのだ。

「どうやって探せばいいんだ」

彼は思わず叫ぶ。

「つぎの出口で、高速を下ります」

佐藤がまえを見たまま、大声で一方的に言った。

「もう、下りるのか。どこへ行くんだ……」

佐藤の大声に誘われるように、彼も声を張り上げる。

佐藤は黙ったまま、ハンドルを大きく切る。料金所のゲートを潜り抜け、一般道路に入った。道路には車が連なっていた。車のスピードが急に落ちる。

「いつまで車に乗れるかな。それにしても、どうしてこんなに混んでいるんだ。一体、どこへ行くんだ、これらの車は……」

佐藤は急にスピードを減速させられてイライラしているのか、独り言のように、口のなかでぶつぶつ言う。

「なにを言っているんだ」

彼は顔をまえへ向けたまま、応える。

車はカーナビの指示に従い、左折する。佐藤はナビの言うままに、ハンドルを切っていく。車は大通りから街のなかへ入り、繁華街を通り過ぎたところで止まった。

「あそこだ」

フロントガラス越しに街並を眺めていた佐藤が大声を出した。探していた建物が見つかったらしい。

佐藤はふたたび車を動かし、車を駐車場に入れると、彼を促し、車から降りる。

駐車場の横に四階建てのビルがある。ビルの壁から張り出した看板に

「佐橋クリニック」とあった。

「佐橋……」

その瞬間、彼の脳裏に佐橋祐子が浮かび、彼女と過ごした日々がまざまざと甦ってきた。彼は全身で彼女を感じ、激しい目眩に襲われる。立っていられなかった。彼は身を屈め、しばらくじっと堪えていた。

佐藤は彼を残したまま、ビルに近寄る。「佐橋クリニック」は二階にあった。彼に構わず、佐藤は階段を上って廊下に立ち、ドアの自動開閉ボタンを押す。クリニックのドアが左右に開いた。

エントランスホールといっても一寸幅のある廊下といった感じの広さしかないが、ここが待ち合い室となっていて、壁際に長椅子が二列並んでいる。

佐藤は受付カウンターに近寄り、名刺を差し出し、院長に面会したいと告げた。

白衣を着た受付の係りの若い女のひとと入れ替えに、白衣のガウンを着た院長が顔を出した。額のはげ上がり、かなり年配の赤ら顔のでっぷりし

た老人だった。

「まえにお会いしたことがありますか……」

院長はカウンター越しに佐藤をじつと見た。ドアが開閉する音がした。男が入ってきた。急に、院長の視線が動いた。

「あ……」

院長の口から声が漏れた。院長は急いでカウンターのなかから出ると、ドアから入ってきた男に近づく。

「あの……、九鬼さんでしたね。いつ、帰国なされたのですか」

院長は彼を懐かし気な目で見つめた。

彼も佐橋院長の顔をじつと見た。彼は院長の表情に佐橋祐子の面影を探すが、彼女の葬儀のとき一度会ったことしかない院長の顔には彼女と似たところは一片も見当たらなかった。

ひとこと、ふたこと言葉を交わすと、佐橋院長はふたりを別室へ案内した。予備の治療室のようで、さまざまな医療器具のほかには小さな机と丸椅子があり、壁際に幅の狭い診療用のベッドがあった。

「ここには応接室といったものは用意していませんので……」と言いながら、院長はふたりに丸椅子をすすめる。

佐藤は珍しそうにしばらく辺りを見回していたが、院長と目が合うと、抱えていた紙袋から一枚の写真を取り出して差し出す。

「これは……」

院長の顔が曇った。

「お孫さんのヒロシくんじゃないですか」

佐藤はすかさず言う。

院長は写真を手に持ったまま、いつまで待っても口を開こうとしない。

彼は院長の手から写真を奪うように受け取ると、食い入るように見た。はじめて見る写真だった。

「どうしたんだ、これは……」

彼は佐藤に詰め寄る。

佐藤が火山噴火のテレビを観ているときにヒロシくんらしい少年を偶然見かけたので、テレビ局に問い合わせ、写真を取り寄せたのだという。

「ヒロシくんか分からなかったが、なんだかヒロシくんのような気がしたので、突然で不躰ですが、一度確かめたかったものですから、お伺いした次第です。実は……」

佐藤は九鬼のひとり息子のアキラがいまだに行方が分からずにいることを急いで付け加えた。

「……………」

それを聞くと、院長は口をぱくぱくさせたが、声にならなかった。

「アキラくんが中学生ぐらいの少年と一緒にだったという情報があったので、もしかしたら、その少年がヒロシくんじゃないかと……」

「うむ……」

院長は交互に二人の顔を見ているだけで、話そうとしない。

「これは全くわたしのカンです。新聞記者としてのカンといたらいいでしょうか。なぜかそんな気がしたのです。写真の少年はヒロシくんですか」

院長は微かに頷く。

「ヒロシくんはいますか。是非、会いたいのですが……」

佐藤は院長を追い込むように急ぎ込む。院長の顔に苦悩の表情が表れた。

院長は立ち上がると、窓辺に佇み、ガラス越しに外へ視線を向けた。しばらくして、殊更ゆっくりとした足取りで椅子に戻ると、おもむろに顔を上げ、二人を見た。

「ヒロシはなにも言いませんが、未だに母の死を受け入れることができないのです。母は生きていると信じ、母探しをつづけているのです……」

院長は漸くゆっくりとした口調で話し出したが、ここまで話すと、目を潤ませ、二人をじつと見たまま、しばらく口を閉ざしていた。

彼の脳裏にあの日のことがまざまざと浮かぶ。

ヒロシの母佐橋祐子は一級建築士で、七年前の巨大台風来襲の日、非常用階段で足を踏み外し、不慮の死を遂げた。彼女は当日、自ら設計に携わった超高層マンションの最上階に設けられた観測室で、超高層マンションの各部に設置した震動計から送られてくるデータをチェックしていた。日本でも超高層ビルが続々と建設されていたものの、当時は超高層建築物の地震時や台風時のデータがまだまだ少なく、また、超高ビルの耐震性に関する知見も不足していた。これらのデータは超高ビルの耐震チェックや設計には欠かせないデータだった。

事故は停電に見舞われ、彼女が自室へ戻る途中の出来事だった。安否を気遣い、超高層マンションを訪れた九鬼と佐藤の二人によって非常階段で倒れていたところを発見されたのだった。

「実は、ヒロシが超高層マンションへ戻ろうとしないので、祐子は超高層マンションを出る決心をしていたのです。ヒロシをわたしどもに預け、残っている仕事を片付けるために単身で超高層マンションへ戻ったのですが、そのとき、事故に遭ったのです。あまりの突然の事故のせいか、それとも現場に居合わせてなかったせいなのでしょうが、どんなに話して聞かせてもヒロシは母の死を信じようとしません……」

佐橋祐子はヒロシと一緒に超高層マンションに住んでいた。棟続きの幼

「稚園に通い、年長組になったばかりで、楽しい毎日だった。ところが、ヒロシが急に超高層マンションが恐いと言いだしたのだ。それで佐橋祐子は建築事務所を辞め、超高層マンションから引越すことにしたのだった。」

「確か、年長組だったヒロシちゃんは幼稚園で遊技しているときに台風で壊れたガラスの破片で怪我したことがあったし、停電のなか、超高層マンションの最上階にある観測室から何百段もの非常用階段を下りて避難させられたこともあったらしく、それで超高層マンションを怖いところと感じたのかもしれないね……」

彼は院長の話に触発されて、幼かったころのヒロシを思い浮かべた。ヒロシはひと懐く、彼を見つけると、走りよって来て手を握って放そうとしなかった。

「九鬼さん、ヒロシはあなたをも探していたようです。そしてとうとうあなたアメリカにいたことを探し当てたらしい。あなたに会って、母祐子のことを聞きたかったのでしょうか。ヒロシは夏休みになると、アメリカへ発つていった。でもほどなく戻ってくると、黙って出ていった……」

「すると、いまはどこにいるか分からないのですか」

佐藤が急ぎ込んで院長に詰め寄る。

「はい。ヒロシはどこにいるのか。妻が亡くなって構ってくれるひともないなくなって、ヒロシも寂しくなったのか、ときどき一人旅をするようになりましてね……」

院長は口のなかで呟く。

佐藤は一瞬気落ちした顔で院長を見ていたが、すぐ気をとりのおしたらしく、彼の方に顔を向けると「あの中学生はヒロシくんがちがいないよ」と大声で言う。

「ヒロシが……」

院長は一瞬怪訝な目をして佐藤を見た。

「ヒロシくんはアキラと一緒にいられます」

彼はこれまでのことの一部始終を院長に話した。そしていまアキラを探してるところだと加えた。

アキラを探すことはヒロシを探すことだった。ヒロシを探せばアキラが見つかるのだ。彼はヒロシにも数年も会っていないのに、そして幼稚園児が中学生となってどう変貌しているかも分からないのに、なぜか目のまえが急に明るくなったような気がした。彼は自分をアメリカまで訪ねたというヒロシの記憶には彼の面影がしっかりと刻み込まれているのだと思い込んでしまっていたのだ。

彼は居ても立ってもおれず、佐藤を促し、椅子から腰を浮かした。一刻も早く、ヒロシがいたらしいところへ行きたいと思った。

34

冬が近づき、難民の動きが急になってきた。北から南への大移動がはじまった。

異常な天候は相変わらずだった。北半球では偏西風が大きく蛇行し、不安定さが増していた。酷暑の熱波のあとに、厳寒の寒波が襲う。カンカンと照るかと思えば、土砂降りの大雨が襲うのだ。

現代文明に浸っていた人間は気紛れな天候に完全に翻弄されてしまい、ただ空を見上げるだけで、全くなす術がなかった。

海面急上昇が最御通達だった。

攪乱した地球システムは現代文明で構成された現代人間社会システムにリセット断行を突き付けていたのだ。現代文明人間社会システムがリセットされ、地球システムの攪乱要因を最小化する新しい人間社会システムへと変換され、これが軌道に乗るまで地球システムの攪乱は収まりそうになかった。

海面急上昇で各国の農漁業収穫捕獲量が激減し、世界の農漁業生産高が半減した。世界の食糧事情が急激に悪化し、穀物の国際価格は急騰しつづけ、ついに、現物不足で取り引きが成り立たず、市場が閉鎖された。海面急上昇で土地を追われた人びとは難民となつて近郊の大都市へ雪崩れ込む。世界の饑餓人口が二〇億から一挙に倍増した。

にもかかわらず、人間社会は旧来の手法を変えることができずにいた。限界をわきまえない人間の経済活動は市場原理を信奉する自由主義経済のもと、地球の果てまで資源やエネルギーを漁り、モノを大量に生産して大量消費を促し、それでも足りず、大量に廃棄させ、ふたたび、大量に消費させてエンドレスの経済成長を追い求めつづけるのだ。挙げ句の果てに、自らの生活基盤である地球環境を台無しにしたうえ、大量のゴミの山を築き、有害化学物質で汚染しつくす。これが欲望という猛獣を開放した現代文明社会の経済活動の実体だった。

この醜悪な実体のひとつの帰結が地球温暖化であり、グリーンランド氷床の大滑落であり、海面急上昇だった。そして世界人口の半数を超える五〇億人にもおよぶ難民の発生であったのだ。

全世界で、冬に向かって、北方の難民が動き出した。日本列島でも、北から南を目指して、難民が蠢動をはじめていた。ただ

日本では周囲が海に囲まれているので、外国から国境を超えて大量の難民が移入するケースは少なかった。それでも小舟を操り、日本列島への上陸を試みようとする密航難民が後を断たなかった。だが沿岸浅瀬には海面急上昇で沈没した堤防や埠頭などの港湾施設があり、またビルやマンションなどのもろもろの建造物が海中から突き出ていた。海面急上昇後の新しい沿岸は近づく難民船にとって全くの危険地帯で、多くが座礁したり、船体を傷付けて沈没していった。

日本列島は地球温暖化の果てに、首都圏の沈没、海面急上昇、さらに火山同時噴火、巨大地震、大津波に相次ぎ見舞われた。

日本列島には山岳地帯が多く、人口の大半は沿岸低地に集中している。ことに太平洋岸の低地には都市や工業地帯が連なり、人口と富の集積地帯であった。これらが一瞬のうちに喪失してしまったのだ。

残されたのは、やせ細った日本列島と何千万人にもおよぶ大量の被災者だった。被災者の多くは家を奪われ、働き口を失い、やがて難民と化していった。

さらに追い撃ちが待っていた。地殻変動だった。

日本のいたるところで家を奪われ働き口を失った被災者が大量に発生しつづけていた。働き口を求めるこれらの被災者の多くを受け入れてきた東京圏はいまはなく、大阪圏、名古屋圏も満身創痍の状態であった。中小の都市にも余力はなかった。だが都市に行けばなんとかかなると思うらしく、都市という都市には職と食を求める難民で溢れた。

都市中心部を占拠する難民の数が日に日に増えていくことに怖れを抱いた政府と市町村は市街地のはずれに難民キャンプを設置する。

だがキャンプはすぐ満杯になる。それでも難民はつきからつぎに押し寄

せる。都市中心部に集まる難民の数は増え続け、減ることがなかった。

大量生産大量消費の現代文明都市に安住しきっていた難民の多くにとつて、レバーを押せば蛇口から水が迸り、スイッチを押せば照明が点るし、近くのコンビニやスーパーに行けば好きな食料も手に入る都市生活は忘れがたく、もはや離れがたいものとなっていたのだ。

地球温暖化の果てに、日本では人口の半数が環境難民となったのだ。

難民に占拠された都市には働く機会も食べものも事欠くところだった。難民たちは次第に不満を募らせていく。小競り合いが頻発し、やがて紛争へと発展していく。

都市のいたるところで紛争が常態化していった

日本列島だけではなかった。世界中で紛争が頻発していた。個人や家族レベルの水や食べものを巡る争いが次第に深刻さを増し、集落や市町村レベルへと発展する。国境を接した国々ではやがて国対国の国際的な紛争へと拡大していくのだ。

これまでも異常気象で日照りや大雨で穀物生産が落ち込み、世界的に穀物価格が上昇することはあったが、それでも売買できる穀物はあった。だが海面急上昇以来、事態が急変した。世界中でデルタ地帯が水没し、多くの肥沃な農耕地が奪われうえに、河川に海水が流れ込み、上流まで河川水が塩水化したために広大な範囲で農耕ができなくなった。これらによって、世界の農業生産が激減し、各国とも自国の食糧を賄うのが精一杯で、輸出できるものがなかった。食糧の絶対量が不足し出したのだ。いかなる国ももはやどんなに金を積んでも食糧を手に入れることができなかった。飢餓に襲われた難民は飢え死にするか、命をつなぐために食糧を奪い取るか、いずれかだ。これは個人レベルでも集団レベルでも同じだった。

乾きや飢えには猶予がなかった。

都市では連日食べものを求めるデモが繰り返された。はじめはデモ隊は整然と隊列をくみ、要求を唱えて行進していた。警官のなかにもデモ隊に加わるものさえいた。だが要求が通らず、デモ隊は次第に過激化していく。デモ隊と警官隊との小競り合いが衝突へ発展し、エスカレートしていく。

政府は軍隊を出して治安の維持に努める。だが境界を越えて難民は入ってくる。封鎖には限りがあった。つぎからつぎに押し寄せてくる無数の難民には境界はあつてなきがごとしだった。兵士は疲労し、狂いだし、銃を発射する。

政府も地方自治体もなす術がなかった。各地で紛争がエンドレスにつづく。

35

「大丈夫か……」

九鬼はハンドルを握る佐藤に視線を走らせる。佐藤はフロントガラスに顔を近付け、必死にハンドルを左右に回している。

道路は泥状になった火山灰で覆われた泥道だった。降り積もっていた火山灰に雨が降って、濡れてしまったらしい。タイヤが滑り、ブレーキが効かない。

「通行止めの看板が出ているぞ」

「どこ……」

車が一メートルほど滑って、止まった。

フロントガラスに泥が飛び散り、視界を遮っていた。車が一台も通っていないことをみると、まえにも通行止めの看板が出ていたにちがいない。佐藤は目のまえに視線を落とし、道路の状態に気を配りながらハンドルを握っていたし、彼は佐藤の運転に気を取られ、前方に視線をやることはなかった。二人は通行止めの看板を見落として車を前進させてきたらしい。

「引き返すか……」

「別荘までどのくらいあるのかな……」

佐藤が彼の顔を見た。

「……………」

彼は迷っていた。アキラのことを考えるとじっとしておれなかった。通行止めの道路を車でこれ以上進むわけにはいかない。別荘はどこだ。まだ遠いのか。彼は歩いて行けるなら歩いて行きたいと思った。

訪ねる別荘は佐橋院長のものだった。院長は別れしなに、二人に「別荘の近くでも噴火があったので、もしかしたら、噴火のテレビ取材のとき、ヒロシたちはそこにいたのかもしれない」と言っ、別荘の鍵を渡してくれたのだった。

「一端、引き返して、明日また来ることにしましょうか……」

佐藤は彼の目を覗き込む。

「そうするか……」

一瞬、彼はアキラたちがどこかへ行ってしまうような気がしたが、佐藤にこのころのなかを悟られないように目を反らす。

「それが賢明かも」

佐藤は車をバックさせ、ハンドルを切り替える。

火山灰の泥濘のなかで、どこのあるかも分からない別荘を探して歩くこ

とはムリなことだった。彼は黙って、佐藤に従うことにしたのだった。

36

「アキラ、明日、ここを出よう。もう、ここには食べるものがなくなった……」

「お兄ちゃんはお家へ帰るの」

アキラはじっとヒロシの顔を見ている。ヒロシはまるでこのころのなかを覗かれているような気がした。ヒロシはアキラを連れ出したことを後悔していた。

あの日、道端で休んでいると、山道を俯き加減でアキラがひとり歩いてきて、ヒロシのまえを通り過ぎた。ヒロシは気になって後を追いつ、そのまま二人は同じ方向へと歩いていった。これがはじまりだった。

二人は黙って、歩き続けた。まえから小さな車が近づいてきた。二人の横を少し行き過ぎて、車が止まった。

「九鬼先生のところの坊ちゃんじゃないかね」

中年の女のひとが車の窓から思いきり身体を乗りだして、声をかけた。

アキラは女のひとを一瞥すると、また歩き出す、

「きみの名字は『くき』というのか。で『九鬼』と書くのか」

ヒロシは紙に『九鬼』と書く。

「うん、九鬼アキラ」

「アキラくんか。お父さんの名前は？」

「……………」

アキラは黙ったまま、ヒロシを見上げた。

「お父さんは九鬼陽一郎というじゃないの」

「ううん、九鬼信二郎。お医者さんだよ」

「ふーむ、それでどうしてこんなところに……」

「おばあちゃんを探している」

「おばあちゃんと一緒だったの。おばあちゃんはどうしたの……」

「急に、いなくなつた」

「逸れてしまったの、いつ……」

「きのうじゃない、おとといだよ」

「どこで……、逸れたのは」

「向こう」

「おとといじゃ、おばあちゃんはお家に帰っているんじゃないかな。一度、

お家に帰ってみたら……」

「……」

アキラは黙ってあらぬほうを見ている。

「どこなの、お家は……」

「……三丁目の三番地、九鬼医院」

「え？」

ヒロシははつとして、アキラを見た。大体、九鬼という名字も珍しいが、探している九鬼陽一郎の帰国先住所と同じ番地だった。ヒロシは母のことを知りたくてアメリカまで九鬼陽一郎に会いに出掛けたのに、いざ会うとなると急に怖気付いてしまい、いまだにその番地を訪ねていなかった。

ヒロシはアキラをじつと見ながら、頭を巡らす。そして考えついたことは迷子になったアキラを連れて九鬼医院を訪ねることだった。もし、九鬼

陽一郎がおれば、頃合いを見て母佐橋祐子のことを聞けばいい。

だがようやく探し当てた九鬼医院跡には診療所のコンクリート残骸しか残っていないかった。呆然と立ちすくむアキラをひとり置き去りにすることもできず、連れて歩くことになった。

ヒロシは市役所でアキラの両親が津波で行方不明になっていることを知らされた。通りすがりのひとに住民の安否を知りたければ市役所に行けば分かると教えられたのだった。

ヒロシはアキラの両親が行方不明であることを隠し、アキラには知らせなかった。かといってこのままアキラを祖父だけの家に連れていくことも憚れ、とりあえず祖父と度々訪れている別荘をめざしたのだった。

別荘で何日過しただろうか。数キロ離れた近くの山が噴火し、火山灰が降った。一面、火山灰で覆われた。それは見たことない異様な風景だった。それから急に寒くなった。高原の別荘には人影も疎らになった。祖父が蓄えていた食料も底をついた。

「うん、お兄ちゃんも家に帰るけど、そのまえにアキラをお家に連れていかなければいけない。みんなが待っていると思うよ」

ヒロシはアキラの両親が見付かっているかもしれないと思った。ヒロシの頭に九鬼陽一郎の名が浮かんだ。

「どこへ帰るの。お家がなかったじゃない。もう、あそこにはだれもいないよ。おばあちゃんを探さなくちゃ。おばあちゃんをひとり置いてきぼりにできないよ」

「いくら探しても見付からなかったんじゃないのか。もうどこにもいないのかも……。とにかく、アキラのお父さんやお母さんを探さなくちゃ。伯父さんだっているかもしれないし……」

ヒロシは九鬼陽一郎のことを頭に描いていた。アキラを九鬼陽一郎に引き取ってもらおう。

「……………」

ヒロシの言っていることがよく分からないのか、アキラは口を固く閉じてヒロシをじっと見ている。

「明日、九鬼医院にいつてみよう。なにか分かるかもしれない」

ヒロシはもう一度同じことを繰り返しながら、アメリカから帰ってから顔を見ていない祖父にそろそろ電話してみようかと思った。

37

「あそこかな」

佐藤は管理事務所でもらった別荘地の案内図を片手にどんどん進んでいく。九鬼は佐藤のあとを殊更ゆつくりと坂道を上る。

アキラはいるだろうか。ヒロシはどんな顔をして迎えるだろうか。彼は鼓動の高まりを覚えた。

管理事務所までの道路端には寄せ集められた火山灰の山がところどころにあったが、路面にはすでに火山灰はあらかたなく、車の通行が可能だった。だが奥に入ると、道路にはまだ火山灰が残っており、車が通れば火山灰が舞い上る。雨が降れば、路肩に寄せられて火山灰も流れ出し、泥道になるにちがいない。二人は管理事務所前の駐車場まで車を降りたのだった。

一帯は高原で、別荘地は前面に聳える山の南斜面に広がる。二〇世紀末のバブル期に開発業者が思い思いの場所を買い取り、いくつかの区画に仕

切って、建て売りの別荘を建てた。すでに長い年月を経て、なかには手入れせずに朽ち果てたものもあるが、古びながらも未だに利用されているものが多く残っている。

奥まったところに、ひっそりとしたたたずまいの別荘があった。平屋で家の南面に広いベランダがあった。ベランダのうえまで張りだした屋根にはうつつすらと火山灰が降り積もった跡があった。

「誰もいない。窓が開いている。鍵が掛かっているぞ」

ベランダに回り、ガラス戸に顔を押し付け、なかを覗き込んでいた佐藤が叫んだ。

彼は小走りに玄関の階段を上り、ドアに手をかけた。ノブを回すと、ドアが開いた。

玄関から入ると、ガラスを嵌めたドアがあつて、そのさきに吹き抜けの高い天井のリビングが南を面して横に広がっている。中央のリビングがフローリングであるのに対して、左端には八畳と六畳の和室が押し入れを挟んで並んでいた。その反対の右端の隅にシンクやガステーブルがあり、食卓が置いてある。ここがダイニングキッチンスペースとなっているらしい。南側と西側にはガラス戸があつて、ベランダにつながっている。

「出掛けているのかな」

彼は眩きながら、和室を覗く。内部は一応片付いているが、雑誌やパンフレット類、菓子の包み紙や容器が雑然と置いてあつて、いままでひとがいたような気配があつた。

「空っぽだ。食べものはなにもない」

冷蔵庫の扉を開いた佐藤が叫ぶ。

彼はテーブルの椅子に腰を下ろし、戸棚や棚の戸を開けてなかを覗いて

いる佐藤を見守る。食べものがなくなつたので、アキラとヒロシは一緒に買い物に行ったのかと思つた。もうじき、二人は食べものを抱えて戻ってくるにちがいない。ようやく、アキラに会える。彼はふたたび、鼓動が高まり、息が詰まりそうな緊張を覚えた。

だがアキラたちはなかなか戻つてこない。佐藤も別荘の探索を一通り了えると、まわりを見てくると言つて、出ていった。

彼はひとり別荘で待つた。だがいくら待つても二人は現れない。佐藤も出ていったきり戻つてこない。彼はいらいらしながら、リビングを歩き回る。

不意に、彼はアキラとヒロシが別荘から出ていったような気がした。二人は別荘にもう戻ることがないのではないかと思つた。

彼は急いで外に飛びだし、佐藤を探した。早く追いかけないと、二人にはもう会えないような気がした。

辺りには佐藤の姿はなかった。彼は大声を出して佐藤を呼んだ。何度呼んでも返事がなかった。

彼は管理事務所へいつてみた。佐藤は噴火のことを管理事務所のひとに話を聞いているのかもしれないと思つたのだ。だが佐藤はいなかった。駐車場には車もなかった。

彼は途方に暮れて、しばらく駐車場で立ちつくしていた。彼は別荘へ引き返すほかなかった。

別荘に戻ると、玄関の扉が半開きになっている。一瞬、彼はアキラたちが戻ってきたのかと思つた。だがリビングにもダイニングにも二人の姿はなかった。

彼は和室や洗面所はもちろん、風呂のなかまで覗き、二人を探したがど

こにもいなかった。彼は未練がましく、同じところを何度も覗く。揚句の果てに、押入れの戸を開けたり、トイレのドアを開くが、二人の姿は別荘のどこにも見付からなかった。

彼は疲れて、ダイニングのテーブルの椅子にどかんと腰を下ろす。ふと、もしかしたらアキラにもう会えないような気がした。急いで打ち消すが、気落ちして疲れがどつと出た。彼はテーブルにうつ伏せになって、佐藤が戻ってくるのを待つた。

眠ろうとしてうつ伏せになつたものの、身体は疲れているのに頭が妙に冴えわたつて眠ることができなかった。彼は閉じた目のなかを覗き込むように、光のない世界を彷徨う。

彼はアキラが泣きべそをかきながらひとりで放浪しているにちがいないと思ひ込んでいた。それがヒロシと出会い、アキラがヒロシと連れ立って歩いていけるらしい。このことは彼にとってひとつの救いであった。

彼は目に見えない糸で二人が結ばれていたようにさえ感じるのだった。彼はアキラを残して逝つた妻重耶子を思い浮かべ、ヒロシを残して事故死した佐橋祐子を想つた。二人の母親たちが二人を結びつけたのだろうか。

だがヒロシが母佐橋祐子の死を受け入れていたなら、アキラがヒロシと出会うことがなかった。母の死を受け入れられないヒロシが九鬼を探していたから、アキラがヒロシに出会えたのだ。彼は数年経ても母の死を受け入れようとしないヒロシの心情を思い、内心忸怩たる思いを禁じえなかった。

何年もの間、幼いアキラを母に預け、同居の弟夫婦が養子に欲しいということをいいことにアキラを放置して、彼は米国へ旅立った。数年間、アキラのことも忘れ、研究に明け暮れる毎日を過してきたのだ。

母は死に、弟夫婦は津波に遭つて行方不明になつた。ひとり残されたア

キラは祖母の死も知らずに、行方不明の弟信二郎夫婦を本当の父母と思い、祖母を探しつづけているのだ。

彼は大きく息を吐いた。彼は今更、アキラに自分が本当の父親だと名乗ることが憚れるような気さえするのだった。

38

「お腹空かないか」

ヒロシはアキラを振り返った。

「ううん……」

アキラは足を止め、ヒロシを見上げる。

「ダメか……」

反対側に目を向けていたヒロシが肩を落とす。

二人は朝起きると、別荘を出た。食べものはなにもなかった。朝、二人が口に入れたのは水だけだった。

一番のバスで駅へ行き、電車に乗る予定だった。バスの停留所は別荘から歩いて三〇分の距離にあった。途中、まわりにトウモロコシを植えた小さな畑があって、夏の間中、トマトやキュウリなどが実っていた。ヒロシはそのことを思い出し、当てにしていたのだった。

火山灰が畑一面を灰色に染めている。夏には青々とした葉を茂らせ、実を实らせていた作物は見る影もなく立ち枯れて、まるで化石のようだった。

火山灰の降灰は農作物に致命的な被害をおよぼしていたのだ。
二人は歩き出す。バスが通る道に出た。停留所はもうすぐだった。

突然、アキラが地面に蹲った。

「どうしたの……」

ヒロシが駆け寄る。

「足が……」

左足の脛脛が痙攣している。ひとの姿も車が通る気配もない。ヒロシはアキラをおんぶして歩き出す。とにかく、停留所まで行ってバスに乗らなければと思った。

ヒロシはアキラをバス停留所のベンチに下ろし、横に寝せた。

「痛い。もう少しでバスが来る。我慢して……」

ヒロシは話しかけるが、アキラは目を閉じたままだ。足が痛いのか、ときどき顔を顰める。

ヒロシはアキラをじっと見た。アキラを背負ったときの驚きが蘇ってきた。アキラがこんなに軽いとは思わなかった。アキラが背に手をかけたとき、かなり重いだらうと思いい、力を込めて立ち上がったが、あまりの軽さに拍子抜けしてしまったのだった。

アキラは何日も食べものを十分摂らなかつたのか。祖母を見失って以来、食べものが喉を通らなくなっていたのだろうか。それとも幼いところで遠慮して十分食べようとしなかつたのだろうか。ヒロシはアキラの痩せた顔を見ながら、こんなに痩せてしまっているのに全然気付かずにいた自分を激しく責めた。

アキラはベンチで身体を震わせている。

「アキラ、もう少しだ。頑張れ……」

ヒロシは声を掛けるが、どうしていいか分からない。ヒロシは道路に出てバスが来ないか見るが、バスはなかなか来ない。

遠くから車が近づいてきた。バスかと思って待ったが、小型のトラックだった。

ヒロシは手を広げて、合図した。

「すみません。病人です。助けて下さい」

小型トラックに向かって、声を張り上げる。

「どうしたのかね……」

助手席の窓ガラスが開いて、中年男が顔を出した。

「アキラが突然、倒れてしまって……、病院へ……」

ヒロシはしどろもどろに応え、ベンチに横たわっているアキラを指差す。

「急患か……」

小型トラックのドアが開いて、二人の男が下りてきた。運転していた若い男と助手席の中年男だった。

中年男がアキラに近づき、声を掛けるが、返事がない。腕を握り脈を取る。下瞼を下げて目の中を覗く。

「きみたちは朝食したかね。これからどこへ行くところなの」

中年男は一瞬厳しい目をしたが、一転してヒロシに笑顔を向けた。ヒロシは久しく見ることのなかった柔和な笑顔だった。

「食べるものがなくて……」

ヒロシは一瞬、涙ぐむ。

この数日、十分な食事をしていなかった。ヒロシは残り少ない食べものを長持ちさせようと、毎日少しの食べものしか摂らなかつた。ひとつのシーチキンの缶詰を二人で分けることもあった。お茶の葉を食べたり、チョコレートや煎餅だけで済ますこともあった。

ヒロシはこれからの予定を話した。

「きみたちは兄弟じゃないの。この子のお父さんとお母さんも未だに行方が分からないのか。で、きみはこの子と……」

中年男はヒロシに柔和な笑顔を向ける。ヒロシはじつと中年男の目を見た。ヒロシは一部始終を話した。若い男もそばで聞きたいた。

「所長さんのところに連れていくのが一番じゃないですか」

「うん、そうするか。その先のことは回復してから話し合えばいいか」

所長と呼ばれた中年男はヒロシに「わたしの診療所で治療することにするので、きみも一緒に来るように」と言い、二人を荷台に載せた。

39

南半球で火山の噴火がはじまった。南米大陸の西海岸に連なる火山帯で、連鎖反応のような噴火が起き、北から南極大陸へと向かう。

連日、噴煙を噴き、噴煙が噴煙を押し上げていく。噴煙の頂は一万メートルに達し、それを超えて上昇をつづけた。

北半球においても、未だにときおり火山が噴火を起し、噴煙を立ち昇らせ、火山灰を撒き散らす。地震も相次ぐ。スローペースながら、世界各地で地殻変動の兆しがあらわになりだし、やがて来る大変動を予感させた。

にもかかわらず、人間社会はなにひとつ積極的な対策を講ずることができずにいた。

世界には欲望を基盤とする資本主義経済活動が幅を利かせ、反対勢力を自由競争の論理で打ちのめしていく。大量生産大量消費大量廃棄を促して利益追求に血道を上げ、活動の場をグローバル化して国家による規制を逃

れ、エネルギーを大量に消費しつづけて地球温暖化を進め、地球環境を破壊していったのだ。その証拠が大気中における人間活動による二酸化炭素の増加であった。

石炭、石油、天然ガスとつづいた化石燃料の大量消費による大気への二酸化炭素の大量排出によって、対流圏における大気中二酸化炭素濃度が二〇世紀の一〇〇年間で三〇パーセント以上増加した。その後もこれを超えるペースで増加しつづけて、大気中二酸化炭素濃度はいまや、産業革命以前に比べ、倍増しつづけた。これらはすべて人間活動に基づくものであった。

大気中二酸化炭素濃度が急激に増加しはじめ、地球温暖化に対する対策が国際的に議論されるようになって以来、何度か二酸化炭素排出量の削減のための国際的行動がとられようとしたことがあった。だがすべてが失敗に終わり、大気中二酸化炭素濃度の増加に歯止めをかけることができなかった。

国際社会では先進国と途上国がいつまでも対立をつづけて、両者とも地球温暖化をたかだか地球が温暖化することぐらいにしか考えていないふしがあった。ことに、国を超え、グローバル化した企業のリーダーたちはあくまで経済成長を第一に追い求め、頭から地球温暖化を軽視する態度にできることが使命であるように振舞った。そして地球温暖化をあざ笑うように、化石燃料の大量消費を促しつづけて、二酸化炭素を大量に吐き出しつづけた。

だが地球温暖化は地球温暖化だけに止まらなかつた。地球温暖化の果てに、地球システムの攪乱によって自らの活動の場を喪失した企業に待っているのは人類を道連れにした破滅への一本道だった。

地球温暖化は全世界にかつてない異常気象を頻発させ、気候異変をもた

らした。日本列島では熱水塊に襲われ、列島が焦熱地獄と化した。さらに、超大雨や超巨大台風に見舞われた。

地球温暖化にはじまった気候変動は、やがて地球の大気大循環を狂わせ、海洋大循環に影響をおよぼす。そして大気システムを大攪乱し、海洋システムに大攪乱をもたらしていくのだ。

大気システムや海洋システムの大攪乱は地殻システムへと伝播する。そして地球システムの攪乱を招く。地球システムの攪乱は大気システム、海洋システムそして地殻システムへとフィードバックされ、増幅が増幅を生み、システムの攪乱の増幅が繰り返されていく。

こうして生じた地球システムの攪乱は人間から活動の場を奪い、地球システムの攪乱の高まりとともに、人間の活動の場が次第に狭まっていくのだ。

地球温暖化の果てに生じた地球システムの攪乱は、まるで投石によって生じた湖面の波紋が時を追って広がっていくように、いまだ時間を追って広がり激しく揺れつづけているのだ。

40

「なんだ、あの音は……」

九鬼はテーブルから顔を上げる。うつ伏せになって、うとうとし出していたときだった。大きな音がして、窓や戸のガラスがびりびりと震えた。

近くで火山が噴火したのかもしれない。

彼は窓から外を覗く。夕闇が迫っていた。南斜面にある別荘は東西に長

く、南側の遠方に街が見える。北側には山頂へ向かってなだらかな斜面が上っている。山の後ろには山が幾重にも重なり、幾条もの山並が走る。

彼は玄関に走り、山頂の方向のドアを開く。薄明かりの空にダークグレイの噴煙がもくもくと上っていた。急いでドアを閉じてリビングに戻ると、窓越しにベランダを覗く。床や手すりにうっすらと灰が積もっていた。

彼はしばらく窓辺に佇み、外を眺めていた。夕闇の迫る中で木々や別荘の屋根が白ぼつく浮かんで見える。

不意に、火山灰の降るなかを逃げ惑うアキラとヒロシが現れた。二人を招き入れようと、彼は急いでガラス戸を開ける。二人の姿は消えていた。

彼は目を凝らし、二人の姿を探した。ベランダから飛び降りて、別荘のまわりを見て回る。だがいくら探しても、どこにも二人の姿はなかった。

彼は諦めてベランダに戻り、ガラス戸を閉める。彼は未練がましくガラス戸越しに外に目をやっていたが、肩を落としてテーブルに戻った。

テーブルの椅子に腰を下ろしてもアキラとヒロシの姿が頭から離れなかった。アキラはいつも幼く、ヒロシはテレビ画像のヒロシだった。彼の記憶には幼いアキラしかないのだ。彼はアキラを思い浮かべる度に、苦い思いの中で、アキラはもう少し大きくなっているはずだと修正していたが、火山灰のなかを逃げ惑うアキラは幼いままだった。

「アキラ、どこにいる。どこへ行ってしまったんだ」
彼は大きな溜息をつく。

地震に驚かされ、火山噴火に追われて逃げ惑うアキラを思うと、彼は胸が張り裂けるような痛みを感じた。アキラやヒロシを襲う地震や噴火は、一見、自然現象である天変地異のひとつとみえる。だが実は、これらは単なる自然現象ではなかった。それは自然現象の衣を纏った人為的な災害だっ

た。その原因は、もとを質せば、アキラやヒロシよりも古い世代の人間が現代文明を謳歌して大気中へ吐きだした大量の二酸化炭素であり、これによって生じた地球温暖化に起因するものだった。

現在、われわれを悩ませている日本列島を襲った一連の自然現象は、このような仕組みによって生じた人為的災害だった。アキラやヒロシの身を案じる自分たちがその原因をつくり出していったのだ。未来の世代の子供たちを案じる自分を省み、地球温暖化の原因をつくった現世の人間として彼は矛盾に満ちた行為に苦しみ悩むほかなかった。人間はなぜ飽きもせず欺瞞を繰り返し、偽善に満ちた生活を送るのか。

彼は気候変動予測研究においては可能なかぎり正確な予測結果を出すことを心掛けてきた。これが研究者の社会的責任であると信じていたからであつた。だが自ら原因をつくりだし、異常気象や地球温暖化の発生に加担している自分がこれを予測することにとどのような意味があるのだろうか。

彼は疑問を感じ、何度か研究を断念しようと思ったこともあつた。だがその度に何度も同じことを繰り返してきたことを思い返した。

地球温暖化の果てに、人間は人類を絶滅しかねない天変地異を招いてしまったのだ。

彼は自分には火山灰から逃げ惑うわが子アキラを哀れむ資格がないと思つた。いや、すべての人間は地球温暖化の果てに起こる自然災害を甘受するほかないのだ。人間が自ら招いた災害をそれとは知らずに天災に遭う不運を嘆くことはできないのだ。

彼は自分の愚かさを笑い、もはや、アキラやヒロシを探すことは止めるべきでないかと思つた。

彼は暗闇の迫るリビングで、これから死刑執行を受ける罪人のように、

何時間も身動ひとつせずじっとしていた。

突然、リセットボタンが押されたように、一瞬、時間が戻った。彼の脳裏に佐藤のことが蘇ってきた。

佐藤はどこへ行ったのだろうか。なぜ黙って出掛けたのか。直ぐ戻ってくると思っていたが、まだ帰って来なかった。

もしかしたら、佐藤も消えてしまったのかもしれない。切っても切れない関係にあるはずの親子の関係でさえも、溶けた消えてしまうのだ。

彼は佐藤の姿が見えなくなっても別に気に留めなかった。佐藤は黙って姿を消すことが度々あったし、それよりも彼はアキラとヒロシのことが気掛りだった。彼は二人がそのうち別荘に戻ってくるかもしれないと思い、テーブルの椅子に腰を下ろして何時間も待ち焦がれていたのだ。

だがいくら待っても二人は戻ってくることはないのだ。

夕闇が部屋の中まで押し寄せた。照明が点ると、リビングにただひとり取り残されている自分を強く感じた。孤独感がひしひしと迫ってくる。彼は佐藤が早く戻ってこないかと思った。

ふと、彼は佐藤が「食べものがなにもない」と叫んでいたことを思い出した。

アキラとヒロシは食べものを食べ尽くして他所へ移動してのだろうか。それとも食べものを調達するために外へ出ていたのか。

彼はふたたびアキラとヒロシに思いを馳せる。二人のことを忘れてたくても忘れることはできなかった。考えまいと思っても考えてしまうのだ。

彼は別荘へ来る途中、スーパーやコンビニを見かけなかったし、開いているレストランやカフェにも気付かなかった。

二人はどこへ行ったのか。佐藤はどこへ行ったのか。もしかしたら、佐

藤は食べものがいないことに気づき、二人を追いかけていったのだろうか。

二人は食べものもなく、空腹を抱え、道端に倒れ込んでいるのではあるまいか。

不意に、ヒロシが彼に会いにACARを訪ねたと院長が言っていたことが思い浮かんだ。とすると、いずれヒロシはアキラを連れて彼を訪ねてくはずだ。

彼は立ち上がると、玄関のドアを勢いよく開け、外へ飛び出していった。

エピソード

化石燃料消費にともなう大気中への二酸化炭素排出量の増大によって生じた地球温暖化はまさにエネルギー多消費型現代文明の副産物であったが、人類にとって不幸なことに、気温の上昇だけに止まらなかった。

地球温暖化の果てに、大気大循環が変わる一方、氷床や氷河が溶け出し、これにグリーンランド氷床の大滑落が加わって海面が急上昇するとともに、海洋大循環もピンチに見舞われた。

これらの大気システムと海洋システムにおける大変動は地球システムにさらなる大変動を呼び起こす。地球の自転速度を変化させ、地球内部の動き（マントル流動）に影響をおよぼしていった。

マントル流動の変動により、地球は地殻変動を引き起す。また地震や火山噴火が頻発することになった。

地球温暖化による大気圏、水圏、地圏の変調は地球システム全体の変調をよんだが、これで終わりではなかった。さらなる地球システムの変動を呼び起こし、さらに予期せぬ結果をまねくことになるのだ。

地軸が揺らぎ出すのか。

グリーンランド氷床滑落によって生じた地球のバランスの崩れが解消するのか。それともさらなるインバランスの状態が生ずることになるのか。

南極の氷床が溶け、南極氷床が海へ流れれば、どうなるか。果たして南極氷床の大滑落は生じうるのか。もし生じるとすれば、それはいつになるのか。

南極氷床滑落による海面超上昇はあるのか。そのとき、地球の地表はどう変わるのか。極はどうなるのか。地軸の揺らぎは拡大するのか。

そのとき、日本列島はどうなるのか。地球システム攪乱の影響は北半球の中緯度に位置する日本列島にとくに大きく現れるが、今後、日本列島に何が起こるか。

一方、日本列島のなかではいま、何千万の難民が右往左往している。政治はもはや機能せず、中央と地方の行政も目先の被害者救済処理に追われ、将来の方向性も出せないまま、その日暮らしをつづけていた。

だがいくら待っても事態が好転することは期待できなかった。天候不順、火山灰による日照不足により世界の農業生産量が極端に減少し、世界の食糧備蓄がゼロとなり、世界的に食糧の絶対量が不足し出した。食料を求めて、北から大量の環境難民が南下し出した。国際社会に不穏な雰囲気は漂いはじめ、いたるところで一触即発の事態に陥っていた。各国は環境難民の流入を阻止しようと国境を封鎖し、軍隊の常時配置に踏みきっていた。

続地球温暖化の果てに第三部―震え火を噴く列島

生野以久男

二〇一〇年八月二〇日第一版発行

(c) Ikuno Ikuno 2010

発行所 kinokopress.com

代表 森岡正博

所在地 大阪府堺市学園町一―一 大阪府立大学人間社会学部

倫理学研究室内

連絡先 www.kinokopress.com 内の連絡先に問い合わせ

本文レイアウト+デザイン 森岡正博

本書およびPDFファイルの無断複写は、著作権法上の例外を除き、禁じられています。

ISBN なし